

---

# 精靈王転変

笹野

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

精靈王転変

### 【Zコード】

N4682X

### 【作者名】

笠野

### 【あらすじ】

不覚にも人に囚われた精靈王はそのまま封印され、そこから流れ出す膨大なエネルギーを利用されるだけの存在となってしまった。それから100年後、平和と繁栄の象徴となつたキリーク王国から物語は始まる。

## プロローグ1（前書き）

学生の頃ノートの端に連載（？）していた落書きを読みやすこよつに書き直して投稿してみました。

## プロローグ1

キリーク王国。

初代王ヴァーウェンはエルという精霊王を城の塔に閉じ込める事に成功し、エルから流れ出る膨大なエネルギーを背景に機械文明を発展させた。

エル捕縛から100年。

第4代キリーク王ヴァーレリオ王と隣国アルシュ王国の第一王女ソフィアの結婚式が首都ルーパスで盛大に行われ、それから1年目にしで彼女は待望の第一子を身籠つた。

全てが満たされた日々が続く…だが在る日。

空がどこまでも青く澄みわたり雲ひとつ無い晴天の日、王妃ソフィアはなぜか中央塔が気になつてしかたがない…

\*\*\*\*\*

「貴方に不自由をさせることは無いと思う。何か欲しい物があれば遠慮なく言いなさい。

手続きさえ踏めばこの国の何所に行くのも自由だ。ただ…中央塔にだけは近づいてはいけないよ。」

結婚の儀式が全て済んだ時に王から言われた言葉。

王妃ソフィアは結婚してからその言葉を忠実に守ってきた。

やさしい夫、広大な宮殿、礼節と秩序の満ちた国。

そして高度なテクノロジーと行き届いたコーティリティ。

例えば衣装部屋にある小さな洗面台。

そんな所でさえ蛇口をひねれば無色透明な温水が流れ出す。

これは宮殿だけでなく庶民の家でも使われている設備だ。

生まれ故郷のアルシュ王国はキリークからの恩恵を受け産業も発展

しインフラ整備も整つている。

が、常時温水が使えるような設備を設置する余裕はまだない。

窓の外を見あげると中央塔が青い空に向かってそびえ立つ。

そしてその先には壮大で美しく銀色に輝く橢円体、通称”ヨリカゴ”。

それは4本の鉄塔に支えられ地上から1km上空に在る。

今日はなぜかその塔から田が離せない・・・

いつたいあそこに何が？皆のうわさではあそこには初代ヴァーヴェン王が手に入れたこの世を制覇できるほど協力な精霊が封印されているとか。

精霊？それは私の故郷でさえ童話の中や昔ながらの精神世界で語られるだけの空想の存在。

この国には科学があり技術がある。それなのに精霊ですか？でも100年前まではこの国もアルシュ王国と同じ・・・いえ、それ以下のただの集落だったのに何故？

あの塔には100年でこんなに国を変えてしまう何がある。

知りたい・・・！

だめ・・・あそこに入ってはいけない！

でも私は王妃じゃない？あと3ヶ月もすれば子供も生まれるわ。

私はもうこの王室とひとつなのに。

その私が何も知らされない。

そうよ。

王が知つてゐるものなぜ私は知らされないの？

それは・・・おかしい！

\*\*\*\*\*

王妃は王に塔へ入らせてくれとせまるが王は相手にせず、王妃付きの近衛兵に「王妃を”塔への廊下”に入らせるな」と、”ヨリカゴ”への通路に踏み込ませないよう命じた。

それでも尚、王妃は「なぜなの？」と問い、王は「昔からの決まりだ。王以外入る事は許さん。知る必要も無い！」と、不毛な会話のループが続く。

ついに王はそのしつゝさに激昂し、王妃を塔の見えない北の居室に閉じ込めた。

空は澄み、新月がくつきりと闇の中で細いカーブを描いている。夜更けにもかかわらず王妃は窓辺から離れずにいた。

やがて・・・新月が中天にさしかかるつといつ頃、王妃は静かに廊下への扉へと歩き出した。

廊下は真昼のごとく明るく、王妃は扉が開くと一瞬目を伏せた。

3人の近衛兵が立っている。

2人は扉を背に。

1人は扉に向かって。

だが、彼らはピクリとも動かない。

王妃は風の二ソフのように軽やかに彼等の間を通り抜けて廊下に出るとやがて城の奥へと消えていった。

城の廊下は一部は暗いものの主要部は全て電化され、煌々と照明に照らされている。

その中を一人、ナイトドレスに羽織った綿のガウンをなびかせながら

ら歩き続ける王妃。

だが、誰も王妃を止める者はいなかつた。

それどころか、すれちがつても会釈さえしない。

まるでそこに王妃が居ないかのようだ。

北の居室からしばらく入り組んだ宮殿の中を歩き南の渡り廊下から王の寝室に辿り着いたソフィア。

そこに立つ屈強な近衛兵の横をすんなり抜けて扉を開けた。

中は全ての明かりが消えて闇一色。

その中を王妃は音もなく歩いてゆく。

ベッドで眠る王に気を使う様子も無く寝室のまだ向こう側にある小部屋に吸いこまれる。

壁に組み込まれた暖炉の横になにやらボタンが規則正しく並んで美しい幾何学模様を描いていた。

王妃は慣れた手つきで4つの文字を同時に押した。

カチリッ

壁の一部がスッと左右に開く。

そこにあつた封筒とキーを手に取ると、王妃は静かに王の部屋をあとにした。

再び南の渡り廊下を宮殿へと戻つてゆく。

王妃は、スフの花が咲き乱れる中庭を横切り塔への廊下に至る警護者用予備通路に入った。

突き当たりの扉にはやはり幾何学模様の中に組み込まれたボタンがあつたが、王妃は難なく7つのボタンを押し扉を開けた。

塔への廊下は、曲線が入り組んだ美しい柱が24本、左右に対となり天井を支えている。

天井にはやはり照明が組み込まれ、淡く白い光を放ちエレベーターに続く赤い絨毯を照らしていた。

王妃ソフィアの白い影が赤い絨毯の上をゆっくりと歩いてゆく。

その絨毯が導く先には、"コリカゴ"へ向かうエレベーターがあった。そしてその入り口には守護天使の石像が2体で立ちふさがっている。ソフィアは王の部屋から持ってきた封筒から2つのカードを取り出し石像の顔に向かってかざした。

キュキュ・・・キュ・・・キュキュ・・・金属のこすれる音が床下から響く。

そして守護天使が静かに扉を開けた。

誰もが深く安らかに眠り警護の者だけが目を光らせていたいつもと変わらぬこの日。

地上から一つのカプセルが静かに、そしてゆっくりと上空へと上つていった。

## プロローグ1（後書き）

プロローグが一つに収まりきれませんでした、長々しくてすいません。  
ん。

## プロローグ2

新月は中天より傾き、東の空はほんのり明るい。

塔のエレベーターは徐々に高さを増してゆき王妃はその窓から遠くの地平線を静かに眺めていた。

やがて、エレベーターが止まり、ついた先はエネルギー源隔離施設

”ユリカゴ”

エレベーターから一步踏み出ると、ゆるいカーブを描いた廊下に出た。

廊下に沿つて入り口に何かの装置がついたドアが並び、そのドアの小窓から機械類が立ち並んでいるのが見える。

全て自動制御されているのか入つ子一人いない。

廊下をぐるりと周ると、鋼鉄の扉がいきなり目の前をふさいだ。手の中にある鍵をおもむろにその扉の横の穴に探し軽く回すと、力

コソンという小気味良い音がして扉が開いた。

そこは広いフロアにやはり制御装置なのか、おびただしい数のボタンとスライドバーと液晶画面が連なっていた。

そしてフロア奥には幅広い螺旋階段がある。

誰もいないフロアを突つ切り螺旋階段を上へ進んでゆく王女。

そしてついに辿り着いた黒と黄のドアに手をかけると思い切り左右に開けて中へと入つていった。

部屋の中は10?ほど。四方の壁・床・そして天井も特殊な石が使われているようで、踏んだり触つたりすると少しくぼみ、離れるとそこは元に戻った。

そんな部屋の中央部に直径5mほど円形の台があった。

その縁から上部にかけて霧のようなものが絶え間なく放出されてい

る。

『きれい・・・』

なぜか王妃はそう思う。

薄暗い部屋の中、そこはまるで海を切り取ったように青い光がゆらめいている。

そしてその中央。

そこには空中にうがぶこぶし大の黒い石とそれを上下でおさえつけているような直径15cm程の皿状の何かがあつた。

これが封印されていいる精霊？

こんな石ころが？

王つたらこんなものを私から隠していたの・・・？

王妃は円形のシールドをひとまわりして、ある場所から静かに円形の台の上に乗つた。

何も起こらない。

ちょっとにじり寄つて中央の皿に近づく。

ゆっくり観察してみると、石はただ黒いだけではないようだ。

シールドの光なのか自ら発光しているのか、黒い石の表面がキラリと青を放つ。

きれい・・・

王妃は手を差し伸べ

バリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリ

バリバリバリバリバリ

バリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリ

バリバリバリバリ

突然の放電が王女を襲つた

暗い・・・

照明が切れたの？・・・

ああ、何だか身体がだるい・・・

ユリカゴの中心部に”聖源室”と呼ばれている場所がある。

その入り口は厚い扉が二重に重なり黒と黄のまだら模様をつくりあげ、ある場所を押さえないと開かない構造になっていた。  
それを知る者は少なく、ましてやその中に入る権限を持つ者は尠少ない。

そして今、4人の男達がその部屋の中で話し込んでいる。

研 a 「誰も気が付かなかつたのです。」

研 b 「ええ。我々はあのフロアでずっと仕事をしていたので気づかないはずがないのですが・・・」

王 「エルの力が漏れていたのか？」

研 a 「そうとしか考えられません。」

医 「気が付かれました。」

医者の声に振り向いた王はシールドぎりぎりまで近づいて、中で横すわりのまま俯いている王妃を心配そうに見た。

王 「大丈夫か？」

この声はヴァレリオ？・・・ああ・・・

王妃 「ごめんなさい。」

王 「・・・」

王妃 「私...どうかしていたんですね・・・もう一度とこんな事しませ

許して・・・くだ・・・さい

儂げに体を崩し泣く王妃を見かねて王が研究所員に詰め寄る。

王 　　おい、彼女の中に本当にエルが入ってしまったのか?』

「 研究室で間違いありません。」

なんという・・・・!

も、すぐ我手に抱けると信じていたわが子に?

•  
•  
!  
!

「ソフィア……君をそこから出すわけにはいかなくなつたようだ。

うか？

用

研 a 「 王、それは難しいです。」

ヴァレリオ王は憂いの顔に怒りをたたえ研究員を睨んだ。

王「何故だ!?」

相手が王と言えども学術的事実にのみ忠実な研究員はひるまい。

研 a 「エルに触れればその影響は絶対です。お妃様はエルと胎盤で

帶の内に、その説明がある所が、七ヶ所ある。

つかつている。・・・清靈王正レ喪失。そひ

五  
「

ア。 残念だ。

王妃「王！助けて！私を！」から出して下せ」「王

絶句し苦悩の表情を浮かべ王妃を見つめ続けるヴァレリオだったが

政道を見失う事はなかつた。  
妻と子を飲み込んだシールドにきびすを返し、王はその場を立ち去つた。

## プロローグ2（後書き）

長いプロローグ終わりました

## 第一章

ソフィア王妃がエルにより聖源室まで辿り着きシールド内に入つてから全てのエネルギー供給が止まつた。

国内はもちろん電力供給していた近隣諸国も騒然となつたものの、結局5分もしないうちに予備電力が働き50%の地域が復旧した。ユリカゴ内はエルからのエネルギーを使用しない構造になつているのでシールド消失も免れ予備電力への切り替えもスムーズに行われたのだ。

エルはシールドまで王妃を呼び寄せたものの、結局彼女の中の御子に閉じ込められ逃げることはできなかつたのだ。

円形高圧場の一部・彼女が入り込んだ場所に脆弱性を発見した研究員はさつそくそこを改良し、3重構造にすることで内外の接触を遮断、王妃に食事を差し入れる事に成功した。

シールド内で生きていくだけの最低限度の用意を・・・とはいえ。そもそも、なぜ普通より60気圧も高いシールド内で王妃が生きていられるのか。シールドの境目から15cm中までは高温蒸気で包まれているのになぜ無傷でそこを通り抜けられたのか・・・

謎には答えを。

シールド研究と平行して人体研究も行われたがそれも長くは続かなかつた。

予定より3週間も早い御子誕生とともに彼女は出産時にショック状態に陥りそのまま亡くなつてしまつ。

シールドの中の王妃の遺体は3日もしないうちにミイラ化してしまつた。

そしてその横には・・・

出産の時に同時に出てきた胎盤はしだいに血脈を広げ、そのあいまに皮膚状の膜が出来て優しい丸みを帯びまるでチューリップの花の様相。

その膜のむこうに安らかに眠る嬰児の姿が見える。

エルだ。

検査の結果、出産時にひどく低下したエネルギー放出量も3日後には安定し、シーレド内は一ヶ月間測定し続けて安定が確認された。

さて、彼女の死体はその間に縮み続け最終的には50cm程の丸太炭のようになってしまった。

国王は出来るならば王妃を土に埋めたいと思い、研究員はシーレド内に異物がある事に不満を持つていたので、彼女の死体を絶対安全に取り出すプロジェクトは難なく立ち上げられ、試行錯誤とシミュレーションを繰り返し1年後ついに王妃は地上に戻ったのだった。

だが、王妃の為に特殊素材をコーティングされた石棺が地中に納まり祈りが捧げられたその時、王をはじめ全ての参列者が地中から蒸気の立ち上るのを見た。

何も知らない者はただの錯覚か朝霧の名残かと思つほどのわずかな蒸気。

だが、聖源室を知っているヴァレリオ王にはそれで十分だった。

多分エルの残滓に違いないと国王は全世界にその跡を追うべく調査団を送り出す。

キリーク王国辺境の地、ノサツポ。

「村長！一本杉の道から5人、見かけない奴らが来てる。変なリヤ  
カー引いてるぞ。」

「ああ、中央から来た調査団の田那方だりつ。やつと来たか。」  
「やつとつて？」

「この村にもよつやく舗装道路が出来るんだ。」

「え？ 道路？」

「そうだ、すこしだらりー山向いのまでは来てたんだけよつやく  
こつけまで来るやつだ。」

「くええ」

一方、調査団の一一行には静かなどよめきが起つていた。  
電動キヤリーに搭載した計器を囲み、興奮ぎみに話をしている。

「これは間違いない。」

「ここのからじや見えないな。」

「この丘の向こうだ。距離は3km程か。」

「俺が行つてみよつか？」

「焦るな。まだ時間はある。」

「ああ。」

ちゅうどその頃。

丘のむこうではロバに乗つた10歳ほどの少年が坂を上がりきつた  
ところだった。

彼は村の外柵を入ると一番北にある離れの小屋に向かつた。  
そこが彼の生活の場。もつと言えば占い師ディーの家だった。  
ディーは高齢すでに足が萎え、家から出られなかつた。が、口だけは達者である。

「遅いじゃないか！ナーノー！」ほつつき歩いてたんだい」

「別に」

「腹が減つて死にそうだよ。早くめしの用意をしなよー。」

「ああ」

「まったく：ちょっとばかり知恵がついたとたんにサボることばかり考えて」

フー・・・

毎日同じ小言を聞かされるのも疲れる。

調査団が到着するとその夜は歓迎会が開かれ、次の日はさつそく彼らは持つてきた計器で何かを計測していた。

その夜、村長と見慣れない男がディーの家を訪れた。

「わたしはキリークの調査団に同行しているアルガスと申します。」

「調査団の人じゃないのか。何の用だ？」

「キリーク王国の人権擁護に関するパンフレットをまずどうぞ。」

ディーの前に立派な印刷の冊子が置かれる。

ディーの顔がひきつるのを無視してそのまま話を続けるアルガス。

「あなたの所にいるナーノーという子供の事ですが…彼を我々の所に預からせていただきたいのです。」

「は？」

「あの子には首都ルーパスできちんとした教育を受けさせてあげたいのですが。」

「は！教育？何言ってんだい。ここにいたって教えることあキッチリ教えるよ！出でつとくれ。私があの子の親だ。あの子を育てるのは私だ。手放すもんか！」

「あの子の本当の親では」

「私はあの子が生まれたときから面倒を見ているんだ！私の面倒を見るのがあたりまえだろ！あの子がいなくなつたら足萎えの私アビうすればいいのさ！？」

「「こもつともですね……では、あなたも同行しますか？」

「へ？」

ディーは怒り顔のまま口元だけがヒクリと動いた。

予想外の展開に固まつていてる。

「あなたもルーパスへご招待します。あちらの病院へ行けばその足も元に戻りますよ。もちろん現金は渡せませんが宿と食事はわたし達の施設でどうぞ。それにあなたの歳でしたら病院代は無料ですね。」

「ほ、本当か？」

思案するディーの顔はこころなしか微笑んでいる。

「ここで今まで無言だつた村長が苦い顔で割り込んできた。

「アルガスさん。話が違うよお」

「村長。あの子がいなくなればこの方を世話する人を探さねばならないでしょ。わたしが引き受けた方がいいんじやないですか？」

「う・・・ん、だが、ディー様はそもそも祈とう師なんだ。彼がいなくなつたら神を祭る者がいなくなる」

「足が良くなればすぐにでもこちらに帰します。」

「そうか。で、どのくらいで治るもんなんだ？」

「それは、医者に見せなければ何とも。検査の結果はすぐにお知らせします。」

アルガスは口調も人当たりも穏やかなまま村長に言った。

が、村長は何かひつかかるのだ……が、中央の人間にあまり難癖つけてると思われるのも困る。

昨日の歓迎会では、舗装道路が村まで通され車が往来するようになればこの村がどれだけ発展するか教えられて、村人も乗り気になつ

てここのハリソンを付けたくない。

ディーはもはや足が治り自分で出歩けるバラ色の未来しか見えないようだ。

「いつルーパスに行けるんだ？」

「調査団が帰ると一緒にです。」

「いつだ！」イラつくディー。

「2日後を考えています」

「よし用意しよう。」

奥でこの話を聞いていたナーノは喜びに震えた。

こつそりと家を出ると丘に向かって走った。

「ルーパス？ ルーパス！」これから出られる！ もうあいつの面倒を見なくていいんだ！」

## 第一章（後書き）

ちょっと話に無理があつたので修正しました（10／13）

それから2日後、朝日が昇り朝靄が晴れたところで調査団一行と占い師ディーとナーノは村のはずれにある一本杉を背に首都ルーパスへと向かつた。

そこから4時間ほど歩いた所に8人乗りの電動自動車が置いてあるという。

\*\*\*\*\*

「ここで待つか。」

先頭を歩くアルガスが誰かと交信していた手をおろし後ろを振りかえった。

後に続く4人と2人は細い路の中にあちこち浮き出ている太い木の根に腰を下ろす。

道に沿つて川が流れているらしい。

鬱蒼とした下草で見えないが流れの音が聞えてくる。

水筒の水を飲み一息ついて汗を拭く。

時折風が吹きぬけ火照った肌を冷やした。

・・・どこかで鳥の鳴き声がする。

ナーノはその聞いた事のない鳴き声を追つて立ち上がつた。

それは無意識だつたのだが。

その一瞬後、金属音と肉を切り裂く音が背後で聞こえ、振り向く前に何かが倒れる音がした。

ディーが倒れた音だと悟つて危険を察知し、そのまま森の奥へと駆け込もうとしたナーノだつたがすぐに捕らえられ、5人とそれに加わった大刀を持つ男2人に囲まれた。

「苦しみたくないやあばれるな」

「騙したな…あんた達…なんで?」

震える声で訴えるも肩と腕をおさえこまれひざまづくナーノ。

「これで終わりだ」

男が持つ刀が不思議な虹彩を放ち、ナーノの首めがけて振る落とされた。が、

男の身体が一瞬ひかり、そのまま黒焦げになつて倒れる。

「ガス!」

「早くやれ!」

すぐにもう一人がナーノの頭に大刀を突き下ろそうとしたが、突然吹き付けた風の壁に巻き上げられ大木の幹に叩きつけられた。ナーノを押さえていた男はそうなるのを見越してか、いつの間にかナイフを振り上げナーノの首に突き立て……たはずだったのに、それはかなわなかつた。

男が立っていた地面がいきなりななめに割れ、そこから電光が走つたのだ。

地から走り出た稻妻はそこに立つ男達全てを餌食にした。ナーノを後ろで押さえていた男も一度踊るように飛び上がりそのまま倒れた。

稻妻はそのまま消失することなくナーノの身体の周りを縦横無尽に走り回つてはいる……まるで主人にまとわりつく犬のように。ナーノ自身もほんわかとした心地よさを感じるだけだった。

声がした。

男とも女ともつかない声……

『我々はあなたのしもべ。あなたは我々のしもべ。共に生き、共に死す。』

『誰?・・・誰だ!?』

『我々には名がない。あなたもそうであるように……』声はか細くな

り消えた。

それと共にナーノは意識も朦朧として身体の力が抜けてしまい膝をつき天を仰いだ。

地が割れその中に落ちて行きながらはるか上空に見える空の青がナーノを安らかな気分にさせ・・・意識は途絶えた。

## 第三章（後書き）

おおお・・・思ったよりいっぱい読んでくれる人がいる〜!  
嬉しいものです。ありがたや〜（一人）

シャール渓谷。

その上流の川原に2人の男の影。

「バスコーーめしだぞ—————！」

「やつとか・・・腹がねじ切れそうだ。どれ。」

バスコーと呼ばれた男はさっそく渡された皿の中のものにかぶりつく。

「・・・・・どつ？」

「どうつて？うまいよ。」

渡した男は自分の皿をスプーンでかき混ぜながらバスコーの様子を眺めていた。

バスコーはおいしそうに食べている。

ふむ？

「・・・・・・・・・・・・そつか。良かつた。」

「あ、もしや、テメー！俺を毒見に使つたな！？」

「考えすぎだよ。バスコー。」

「いや、おまえはそーゆー奴だ！」

「人聞きの悪い」

川原で、名もない雑草といやに色が鮮やかな川魚の煮込みを食べる

男2人。

川のせせらぎ。

森の木々が風にそよぎサワサワとやさしい音が止まらない。

が、

川の上流から変わった鳴き声が聞こえる。鳥の声？？？いや猿の声。

「なんだろうね。バスコー。」

「さあね。」

「行ってみてくれよ。」

「何で俺が？」

「お前の方が目が効くからさ。近くに行く必要がない。お前の目は鷹より鋭いしね。」

「つまいこと言つて……」

しううがないとバスコーはしづしづ立ち上がり、上流へ歩を進める  
ことしばし。

少し川幅が広くなり、ところどころで巨大な岩が水面に顔を出して  
いる。

その一つ、川のど真ん中で鋭く突き出た岩の上に小猿が一匹座つて  
いた。

しきりに鳥のような声で吼えまくつている。

「ふふーん・・・逃げられなくなつたわけか。へつ明日の朝食だ。」

バスコーはナイフを取りしやすい位置に締め直し、小猿に向かって  
川に入った。

だが、バスコーが岩に手がかかる一瞬前に小猿はみごとな跳躍を見  
せ、一つ飛びで岸に降り立ち逃げていつてしまつた。

「なんだまつたく・・・ありや！？」

岩の影に人が半身乗り上げるようにひつかかっていた。

ナーノだつた。

\*\*\*\*\*

バスコーはナーノをかついでもう一人の相棒、ハリーのもとに帰つ  
てきた。

ハリーはすぐさま焚き火を強くし、ナーノの様子を観察する。

どこにも傷がなく、水も飲んでなさそうだ。

何故こんなところに子供がいるのかという疑問はまず置いといて、着ている服を脱がせ簡易乾燥機に突っ込み、毛布にくるんで横にした。

「小猿が知らせるなんて、確か聖書にそういう話載つてたよな。」「聖人を助ける小動物の話なんざ、古今東西どこにでもある民話だがね。」

「聖人には見えないぞ。」

「そうそういないだろ。聖人。」

「上流の方に人家があるんだろうか。」

「どうだろう…」この服装は旅仕様だから多分道に迷つて川に落ちたんだろうな。」

「つまらん。」

「つまつたら困る。」

「いつそつまれよ。」

「つまつたら面倒だろ。」

「スッポン！」

「やめろwww」

2人が言葉遊びでじやれてくるところドナーノの目が覚めた。

バスコーとハリーはナーノに何者が訊いたが要領を得ず、結局名前とノサッポが故郷と言つ事だけ聞き出し満足することにした。どうせ里に降りれば警察に渡してさよならする間柄だ。ナーノに煮込みの残りをあげて、自分たちはこの森に住むゴザガラを探していると話しおした。

「ゴザガラ？」

「そう。ゴザガラ」

「あれは伝説じゃないんだよ」

「そうそう。実はいるのさ」の森のどこかに。

もくもくと食べるナーノ。

「疑つてゐるね。どうせ俺たちはロマンチストだ。」

「あの・・・・・・ゴザガラって何？」

「へ？」

「は？」

「知らないの？」

「知らない。」

2人はナーノに向かいにっこり笑つた。その笑みはもう少しで高笑いに変わる寸前、なんとか押さえているようなひきつりにも似たものだつた。

「ゴザガラは聖骸靈錄という本に載つてゐる逸話に出てくる仙人なんだ。童話に『とんがり山の仙人』というのがあるだらつゝ、それに出てくるゴザ爺さんというのはゴザガラの事なんだよ。」

「ふーん」

知らないと言つとまた話が脱線するので相槌を打つナーノ。

「ゴザガラは1000m先の話を聞き、暗闇を飛ぶ蝙蝠のはばたきを数え、霧に姿を変え山を駆け下り、風となつて天に上昇すると言われているんだ。」

「その姿は百を超える老人だと伝えられている」

「ゴザガラは一種の自然生命体だね。この星 자체を一つの意思を持つ超自然生命体と考える説は知っているかい？」

「うん」 知るわけがない。

「この星の尊みのすべては偶然や法則なんかの出来事ではなくある意思によって行われている。雨も風も雲も大地の恵みも何もかも」

「そして、この石ころ一つ一つにも意思が宿っている。」

バスローが手元の小さな石を拾つてかかげる。

そしてまるで宝石を扱うがごとく静かに胸に抱ぐのを見てナーノはちょっと引いた。

「ゴザガラは仙人と言われているが精霊だらう。この山に宿る精霊に違いないと思うんだ」

「精霊？」

「山というのは、いろいろな生命体の結晶なのさ。土も石も木もそこにすむ動物たちもね。それら全ての総合生命体といつとこらかな。」

「精霊・・・王」

「おや、精霊王を知つているのか？」

「精霊王に関してはタブーが多くてね。もちろんキリーケではその言葉を口にしただけで警察が飛んでくる」

「そうひ。精霊まではOK。それに王とか、いわんやエルとかきた日にああ・・・」

「あぶねえ！ あぶねえぞバスロー。今君は何と言つた！？」

「は！ 精霊と王とエルであります。」

「続けて言つてみろ！」

「それは・・・ごかんべんを～」

「言え！」

「はつ！精靈王エルであります！」

「よく言つた！おまえに10年の服役を言いわた

す！」

「つてなもんさ」

おちゃらけていた2人はナーノの変化に気がつかない。

「精靈王エル」

「だから言つちゃだめだつて」

ナーノの顔色は蒼白。ゆるりと立ち上がり天に向かい叫んだ。

「精靈王エル！！」

その時地面がゆれた。

「うわっ 地震だ！」

「川がやばい！」

「地割れか！？」

すぐさま荷物を手に持ち川べりから離れようとする2人。

ナーノは未だ焚き火のそばに立ち川を分断する地割れに向かい大きな声で呼んだ。

「ゴザガーラン！！」

地割れに川の水が怒涛のように流れ込みぶつかり合いしづきを飛ばし、霧を生んだ。

やがてその霧は一つの形を作り出してゆく。

「ゴザガラだ！」

「写真取れ！早くバスコー！」

「わーつてる！」

2人がわたわた荷物を解いている間にその像は老人の形となりナーノのそばに歩み寄る。

「王・・・よくおいでくださいました。」

ナーノは霧の老人を見つめた。その目は深い闇に覆われ底がない。

そこにはいるのは精霊王エルの意思を伝えるただの中継道具。

「全ては変わる。だがそれは螺旋を描く」

「上にでしょうか？」

「そうだ。だから希望を持つのだ」

「王よ……」

「この子を助けよ

「この人間の子を……では」

「この子の運命は我に到る。そしてもう一人……たのむ……」  
「わかりました。」

一陣の風が通り抜けた。

老人の姿は一瞬にしてくずれ霧が晴れてゆく。

バスコーとハリーはシャッターが下りないカメラを必死にいじくりまわしていたが被写体がいなくなりケンカをはじめた。

ナーノはまだ一人取り残され、川を見つめている。

川を裂いた地割れはびたりと閉ざされ、まるで何も無かつたように鳥がさえずる。

と、視界の端に鮮やかな青を見たような気がして川下に目を移すと、そこには女性が一人立っていた。

歳は20歳前後ぐらいか……だが、ナーノは何の疑問も無くつぶやいた。

「母さん」

女性はキリーク王国の隣国アルシュ王国から嫁ぎ、非業の死を遂げたソフィア王妃その人だった。

「出た――――――！」

「ゆ、ツ幽霊……！」

「まさか、似てるだけだ。似てるだけっ！ きっとアルシュ人なんだ」

「そ、 そうだよな。俺も写真でしか知らないし。  
パニックを起こした2人だつたが女性は幽霊でも他人の空似でもな  
くソフィアの記憶を持つたソフィア本人だつた。」

## 第六章

ソフィアはバスコーとハリーに自分の生まれ故郷アルシュ王国について行つてくれるよう懇願した。

アルシュ王に会うために。

\*\*\*\*\*

でこぼこの山道を徒步で下りふもとに着くと、そこからは電気自動車で一路アルシュ王国に向かうことになった。

キリークとアルシュの王室がつながった事により国境の警備は人から自動登録機になつっていた。ゲート内を通ると車体番号と運転手の映像が公安国境局に自動登録される仕組みである。

高速公路は一本のみ。

キリークの首都ルーパスからアルシュの首都メイシャルンまで続いている。

高速の途中にある休憩所にはみやげもの屋はもちろん、アルシュ国のご案内や換金所まで設けられていて全て用意万端整えることが出来た。

パシャツ

後部座席にはソフィア王妃とナーノが寄り添いながら眠つてゐる。ハリーはその微笑ましいながめを写真に収めた。

こうして見ると2人は確かに血が繋がつてゐる。

年齢から姉弟にしか見えないが確かに血が繋がつてゐるのを実感する。

「あと1時間で着くと思う。」

「アルシュに来る予定は無かつたからな。バスコー、アルシュに来たことあるかい？」

ないね。

「そつけないな。」

「俺、運転中だから話しかけないで。」

「何を今更。じゃじゃじゃ俺歌でも歌おうかな。」

「やめろ。2人が起きる。」

ハリーは後ろの座席を覗き込

まだつた。

「俺、ソフィア様の御手を取つて道を歩いて来たんだぜ？なんだか俺の手がグレードアップした気がする！」

「どうかソノア様の御手が穢れたんじゃね？」「

「一ノ瀬、おまえは、二ノ瀬の娘だよ。」

高速を降りて街中をしばらく走るとやがて石壁が見えてきた。  
と、言つても高さにして2mほどしかなく、大人ならば簡単に乗り越えられそうだ。

ここから先は上流者の住居である。

通行所を持つた者だけがこの先に行けるが、もしそれ以外の平民が入ればそれは誰であろうと即留置所行きとなる。

まつやかさまに落ちる仕掛けになつてゐる。

最も折らずに生きているとして（重傷含む）、留置所に連れて行かれた者は10日間の拘留と相場が決まっているがこれがなかなか過

酷。

腕白盛りの少年がいたずらに石壁を越え留置所から戻つて来た時は声を失っていたという話もあるぐらいだ。

ソフィアが宮殿に乗り込むにはどうしてもこの石壁の向こうに行かなくてはならないが、そもそも服装がよろしくない。

ソフィアの着ている鮮やかな青いドレス、これはフューネラル・ドレス、いわゆる死に装束であつて普段着るものではない。

まずは身なりを揃えねばならぬので、野郎2人が街中に妙齢の女性の服をあさりに行つた・・・結果、撃沈されて帰ってきた。

アルシュ王国の身分・性別の差をあまりにも知らないで気軽に行つたのが間違いの元である。

まず、男性が女性の服をプレゼント以外で買つ事はありえない。そもそも、この平民の街で貴族が着るような服は売つていない。アルシュ王国は絶対君主制度のもと、身分格差が王貴武農工商と分かれており王貴が内城に、武が外城（石壁内）に、そして農工商がそのまわりに住んでいる。

服装も食べ物も建てる家の材質も全てに規則があり言葉のアクセントも上流と下流ではまったく違つていて、キリーグからいきなり来た人間が太刀打ちできるものではなかつたのだ。

「こええええええ・・・俺、逮捕されるかと思った。」

「キリーグ王国の免許証持つてて助かつたな。」

「まったくだ。免許取つとてよかつた！」

車の中で動悸が収まるのを待ちつつお互いの無事をかみしめあう2人。

「あの・・・」

後部座席からソフィアが声をかけてきた。

「はい！なんでしょうか？」

即座に反応するハリー。

「シャールの川原で拾つた石をまだ持つてあります？」

「ええ、持つてます。少々お待ち下さい。」

川原にあつたちよつと変わつた石を車にいくつか積んで来たので早速王妃にお披露目をする。

「一つお借りします。」

ピンクがかつた石を手にしたので、どうぞどうぞ全部差し上げますと返事をするハリー。

拾っていたのはバスコーだつたのだが・・・

板を出して いる店を左に

後ろから白く細い腕が伸びて道を指示する。

運転しない助手席のハリーはそのたおやかな手の指先をじーーーつと見つめている。

女性らしい小さな手は白く透き通っている。その指先は健康的なピンクに染まり、その爪は綺麗に切りそろえられて綿で磨いたかのように輝いている。

時折、指示どどもは右へ左へやれる手首の動作は滑らかが一優雅ああ、この手に触れたのか。

h  
?

車がいつの間にか止まっていた。

『こいつ助手席で何考えてんだ！』

車が止まつた先に見える路地の向こうをソフィアは指差した。

そこには精靈王を祭つてゐる祭壇場があつた。

4mほどの高さがある四角い塔で、出入り口・祭壇に何をお供えしても自由・お供え物を誰が持つていっても自由といつ奇特な祭壇である。

ソフィアがそこに何かあると言うのなら間違いはないのだろう。  
バスコーは車にあつた余り物・未使用ノートと鉛筆7本を持って祭壇に向かつた。

すぐに帰ってきた彼の手には平民の木染ワシピースと貴族のものと

思われる派手なドレスが握り締められていた。

木染ワンピースを着たソフィアはとても可愛かったがそのままでは浮き立つている。

長い髪をナーノが四苦八苦して編み上げそのボサボサ具合でなんとか街と釣り合つた。

ついでに顔に土をすりこんでもらひ。

「エエから一〇分ほど西に行つた所に私の侍女だった者がおります。そちらを頼ることにしましょう。」

「また案内してもらえますか?」

「もちろんです。」

「それじゃハリー。お前が運転しろ。」

「えーなんつ…………うーーー…………しゃあねーなーあああ…………」

「

空は夕暮れ。

街に灯りがともり、エエの窓からもおこしそつないが漂つていた。

「……」

人間、あんなに目が開くものなのか。  
ソフィアの後ろに立っていたバスコーにはそれが丁度よく観えた。  
ソフィアが叩いたドアの小窓から覗いた目がみるみる小窓比率100%まで大きくなつたのだ。

すぐにドアが開いて一行は奥に入るよう促された。

「アネット。まだわたくしを覚えていてくれたのですね。」

「ソフィア様。貴方を忘れる時は私の心臓が鼓動を止めた時で『ジぞいます。病でお亡くなりになつたとお聞きしましたが、生きておられたのですね……ああ、全ての神靈に感謝します。』

静かに佇むソフィアの前にアネットは膝を付き畏敬の念を込めそのままを両手で包みキスをしてから押し頂いた。

「ありがとうございますアネット。たあお立ちなさい。少し話がしたいわ。」

つややかな茶髪に茶の瞳、歳は40歳くらいだろうか、いじわっぱりした部屋に簡素な身なりをしたアネットはとても品の良い女性だ。夕食を用意してくれると言うので、テーブルに4人で座つて雑談の最中

「階級関係無く王女付きの侍女になれたんですね～うちの王室より進んでるかも。」

と、ハリーが言つた途端にガス台の方で何かを落としたような音がした。

「・・・」

あーーーワケありだつたか？

「おーーーそついえば、車の中にサキイカがあつたはず。ちょっと持

つてきます。」

急いで立つたハリーだったがバスコーに押さえられた。

「静かにしてる。」

「・・・」

ちょうどその時アネットが食事を持って來た。

アネットが王女付の侍女をしていたのは今から15年前の事。

それから3年間ソフィアの側で仕事に励んでいたのだが・・・

「その頃、今は亡きシャーデル王が引退を決めたのです。次に誰が即位するかで城内が大変緊張していました。私の父が第一王子シャンブル様を擁立する側に立ち、結局第一王子フェルーン様が王位を譲り受け即位しました。それで私は侍女を辞める事となつたのです。

「多分、いろいろあつたのだね。」

キリークは絶対君主制度になつてからまだ100年しか経つていない。

しかも、最初に立つた王は武勲の誉れより自然科学重視の学者肌であつたため絶対というところが弱く、最近では立憲君主制に移りつつある。

しかしこのアルシュという国は500年間、紆余曲折はあるうとも王族が頂点に立ち続いているのだ。

「私も罪人として牢獄に入れられましたが、ソフィア様からの恩赦で釈放され身分剥奪だけで済んだのです。」

「も？」

アネットは俯いたままの姿勢で田線だけハリーに流した。

「父は牢獄で獄死しました。」

「そうでしたか・・・失礼しました。」すかさず謝罪するバスコー。

「・・・申し訳ありません。」

ハリーはもう絶対何があるうと誰に頼まれても、今後一言だつて言葉を発するものか！と堅く決心した。

その晩、ソフィアとナーノをアネットの家に泊めさせ、一人は車中泊としやれこんだ。

次の日も朝食を5人分作ってくれたアネットはさすが元侍女である。ソフィアの前には基本を周到したテーブルセッティングがほどこされ、次々に出される料理は量は少ないもののフルコースが並び完璧な給仕のもと食事は終了した。

もちろんソフィアも作法どおりの優雅な手つきで完食した。

ソフィアと同席する事を許されたその他3名はまったく違う料理を出され、目の前の美しい食事風景に見入ったままなんとなく食事を終えた。

さて。

アネット自身は岩壁の中に入る事が出来ないため、旧知の商売人・ロロット商会のバッカラーン会長にさりげなく4人について相談した。110年前、商売を始めた彼の曾祖父ロロットがアネットの4代前ツィール伯爵に贔屓にしてもらつたのを契機に商売が繁盛した為、バッカラーンはツィール家断絶後もアネットの面倒を見ていたのである。

バッカラーンはこの話に興味を持ち4人と面会し、ソフィアが本物であると確信した。

ロロット商会は岩壁内にも店舗をかまえている。

そして、各屋敷に注文の品を配達するサービスも充実していた。その配達リストを見せてもらつたソフィアはそこに何人かの知己を見つけた。

こうしてソフィアは単身、岩壁の向こうに乗り込む事になった。

\*\*\*\*\*

空に小さく雷鳴が轟く。

朝から雲がどんよりとたれこめ、まだ雨は降っていないものの横殴りの風が街路樹をなぶる・・・嵐の予感。

サマーサ・ルン・エズバラン。

彼女はかつて王族専属の乳母であった。子供も2男2女を授かり娘は結婚して手元から離れ息子達は近衛兵舎に引っ越しした。

今は広い屋敷で近衛局に勤めている夫、リスターと共に幸せに暮らしている。

サマーサは、いつもより早く日が覚めてしまい寝室の出窓からそつと外を眺めた。

『いやな天気ね・・・』

これでは今日のお茶会は中止だわ。

庭を見れば剪定された木々が右に左にその枝をやらしている。その向こうに見える道路に一台の運搬車がゆっくりとすべりこんで来た。

「？」

車は道なりに左に折れ裏玄関へと向かった。

サマーサは、なんとなくそれを追つて寝室から洗面所に移動した。洗面所の窓から下を覗くとちょうど車から一人の男が木箱を抱え、運びこもうとしているところである。

それほど大きくないようだが・・・誰かからの贈り物？

「なんでしょう・・・」

心がときめく。

贈り物ならば事前に知らせが来るものでしう。

でも、今日はどうせどこにも行けはしないのよ。  
期待するほどのものでは無いかも知れない。

また夫が下らない防具を買ったのかも・・・でも

あれは私宛のものよ！間違いない！！

いつたい何故こんなに心が浮き立つのかしら。

何故あれが自分への物だと信じているの？

期待しちゃだめよ。

期待しちゃだめ。

と、つぶやきながらいそいそと服を着替えて階下に下りていぐサマーサであった。

木箱には確かにサマーサ宛と書かれていた。

そして送り主の名はエイフォーズと書かれている。

エイフォーズ！？

サマーサは遠い昔、自分の名前を書けたと膝元に駆け寄り報告に来た幼女の顔を思い出した。

自分の名前を並び替えて『これからはこの名前でお呼びなさい』と宣言して怒られたあの可愛らしくもおしゃまな王女・・・  
しばらく2人だけで秘密の名前として使っていたその名前と同じ・・・  
・何故？

「・・・これを2階に運んでもらうだい。」

執事が怪訝な顔でサマーサに一言伝える。

「奥様。まだこちらの品は中身を検めておりません。」

「結構よ。2階にお運び・・・そうね、使つていらない客室で中身を検めましょう。ついてきなさい。」

執事はサマーサのあとに続いて2階に上がった。

そして合図を受けた護衛が荷物を持って2人に続く。

客室はほとんど使われていないせいが、それとも悪天候のせいが、陰湿な雰囲気をかもし出していた。

箱は意外と大きく、室内に置くと存在感がある。

執事が護衛の男に開けるよう指示すると、バルでキュッキュッと簡単に解いていった。

最初に中から見えたものは・・・趣味の悪い柄の布だった。多分、洁の物を使つているのだろう。

多く詰めたのに倒れてしまつたのが多  
少の落とし穴で、護衛が力をこめて上部の釘を抜いたところで箱が壊れ、

中から意外なものが出てきた。

ガツ 護衛は反射的に足でこの不審者を蹴り上げた。

異様な音と共に女性は奥のベッドまで飛ばされた。が、次の瞬間絶叫したのは獲物の方だった。

つま先が骨折していた。

執事は流れるような動作で傍らにあるサーベルを抜き、ベッドにもたれかかりながらこちらを向いている女性に突きつけた。  
女性はそれにひるむ事なく、軽く息を吸うと凜とした声でかつての乳母に命じた。

「サマーサ。この者達を下がらせなさい。」

怪我をした護衛をつれて執事が2階から降りてきた。

使用人たちは何事かと階下から見上げていたが、執事に追い払われていつもの仕事場についた・・・だが、サマーサが客室から出て来る気配は無い。

執事は、急いで近衛局本部にいるはずのリスターに使いを出した。

リスターは馬に乗り、急ぎ我家に帰ってきた。

とてもいやな胸騒ぎがする。

サマーサが会っているという女は何者だ?  
使者が言うにはやたらと筋丈高だつたとか・・・何か脅されてでも  
いるのだろうか。

そんな事に臆すようなサマーサではないと思うがあれでも女性である。

今行くから待つてろ!

そんな意気込みで2階に駆け上がり件の密室の扉をバタンーと開けた。

「...」

「...あなた。早くお閉めになつて。」

妻に促されてリスターは後ろ手で扉を閉じた。  
信じられない。

いや、事実だ。

しかし内部報告ではキリーケで発狂死したはず。

「リスター。久しく会わずにいました。わたくしをお忘れでしちゃう  
か?」

ああ。この声は間違いない!

リスターはすぐに片膝を付き騎士の礼をとつた。

「我アルシュ王国の高潔なる血の一族にして全精靈の祝福を受けし  
ソフィア・ホール・モザレヌ様・・・よくい無事であらせられまし  
た。」

型どおりの挨拶と共に右手にキスをする。

そう。型どおりの挨拶ではあるが、今のソフィアの真実をまさに突いていた。

全精靈の祝福を受けしソフィアは柔らかく微笑んでリスターを見つめた。

生きていると言っていた人間が実は亡くなっていた。

死んだと言っていた人間が実はまだ生存していた。

そんな事はよくある事だ。

驚くほどの事でもない。

リスターは外部からの報告書がまつたくのでたまめ キリーク王國が何らかの意図を持つて流してきた誤報なのではと疑つた。それほど田の前の女性は記憶の中の王女とそっくりだつたからだ。だが・・・確証が欲しい。

「只今朝食の用意をさせます。少々お待ちいただけますか。」  
そうことわりを入れて、リスターは妻を促し2人は客室から出て隣の部屋に入った。

「なんですか？」

「おまえ・・・の方は間違いなくソフィア様だと思つか？」

「ええ。もちろんよ。」

「何故？」

「の方が幼少の頃に使つていた秘密の言葉を知つていたからだわ。

「間違いないのか？」

「疑つているの？」

「とても重要な事なんだよ。とてもね・・・」

「・・・・・・・・・わかつたわ。それではの方に湯浴みをしていただきましょう。」

「？」

「んふっ・・・ずつと気になっていたのよ。あの品の無い低俗なドレス！早くお脱ぎになつていただきたいわー！私が直接湯浴みをしてあの方が本物かどうか確かめて差し上げましょ。」

「ああ。そうしてくれ・・・」

ドレスがどうこうはさて置いて、乳母だつたサマーサがその身体を見れば正体がわかるに違いない。

ソフィアが湯浴みをしている間、館内は朝食の仕度・客室の再清掃・使用者の再編成でおおわらわになつた。

そしてリスターは信頼できる者を2人、早馬を使って呼び寄せた。

湯浴みが終わりサマーサが用意した衣装・白綿のドレスにアルシユ独特的の民族衣装を「デザインしたガウンをまとつたソフィアが客室に戻ってきた。

その神秘さにリスターは思わずつめき声が出そうになりあわててソフィアの後ろに控えている妻に目線を移した。サマーサは夫の視線を受け、こくこくと頷いている。やはり本人なのか。

リスターは軽く深呼吸するとソフィアに向かい2人の女性を紹介した。

「ソフィア様。この者達は私の信頼する騎士で、ゼナイ・ラン・ボレルとテレーズ・ラン・デュクロと申します。」

2人は騎士の礼をとりソフィアの右手にキスをした。女性ではあるが武の者が持つ氣骨を感じさせる良い顔をした騎士だ。

ソフィアが礼を受けくつろぐように言うと、ゼナイとテレーズは一礼して出入り口のドアに向かい警護についた。

今後ソフィアがこの屋敷を後にするまで24時間一人が室内、一人が室外で立ち続ける事になる。

遅い朝食を終え、3人は丸テーブルを囲みお茶を飲んでいる。

窓は豪雨と強風にガタガタゆれ、時折雷が轟き窓が光つた。

室内が暗いため蠅燭が持ち込まれ、仄暗い茜色が3人に柔らかな影をつくる。

口火を切つたのはリスターだった。

「ソフィア様は今後どうなさるおつもりですか？もし誰にも会わずに静養したいのであればこの屋敷にいつまでも滞在していて下さい。

田舎に隠遁したいのであればそのように手配します。」

「ありがとうございますリスター。でもわたくしはどうしてもしなければいけない事があるのです。」

「「」命令いただければどうのような事であるうと我力の及ぶ限りの事は致します。」

「まずは、私の子供を呼び寄せたいと思います。」

「・・・ソフィア様の御子ですか？」

「ええ。名前はナーノといいます。神靈の加護の元生まれた子です。」

「

リスターは「」がいかに重大な事に巻き込まれたか思い知った。ソフィアの子ということはキリーク王ヴァレリオの子でもある。2つの王国の問題を自分の肩に担げるか？

「それは是非お会いしたく存じます・・・で、その御子はいざここ？」

「岩陰そと外にあります。その子には2人に守護の者が付いておりますのでこの3人をわたくしと共に置いていただけないでしょうか。」

「承知致しました。通行書を発行します。」

リスターはドアに立つゼナイを呼ぶと通行書の申込書類を公安局に取りに行かせた。

と、丁度その時ドアの外からテレーズが入室してきた。

サマーサに確認して欲しいことがあるとの執事からの伝言を伝えるためである。

サマーサが出て行き室内が2人になつたところで、ソフィアの顔つきが変化した。

リスターもそれに気がつき身を引き締める。

「先程どうしてもしなければいけない事があると言いました・・・」

「はい。」

「元近衛師団副長エズバルン卿。」

「はっ！」

リスターは背筋を正し命令を待つ。

「わたくしを我兄にして現国王フェルーンの元につれておゆきなさい。」

ソフィアの命令は予想の範疇ではあった。が、それは・・・

「・・・ソフィア様。その結果がどうなるか判つておられますか？」

「必ずしも悪い方へ転がるものでもないでしょう」

「いえ。貴方は今のフェルーン王を知らないのです。肉親の情で近寄ることはおやめ下さい。」

「・・・確かにわたくしは最近のアルシュの情勢を知りません・・・エズバルン卿、教えていただけますか？」

ソフィアは手にしているカップをテーブルに置き真剣な眼差しでリスターを見つめた。

「判りました。」

リスターはその眼差しから視線を逸らせ、天井を見つめながら出来るだけ完結にそして正確に国内の変化を伝えた。

12年前、第一王子フェルーンは弟を斃し王位についた。

しかし即位の後も王位継承権争奪の余波が残り宮中の貴族間に対立の空気が色濃く漂っていた。

そんな折にアルシュの南部から希少価値の高い金属の大鉱脈が発見されたのだ。

フェルーンはそれを手にキリークに接近した。

結局妹とキリーク王との結婚をまとめ上げ、技術協定も締結してきましたで宮廷内ではフェルーンの評価が一気に高まつた。

キリーク側にしてみれば大鉱脈の事もさることながら、アルシュ王国という歴史は長いが与し易い国に近づき、更なる経済発展の起爆剤にするという構想と新興国として他の国に軽んじられない為の布石を打つておきたかったという疑惑もあって一概にフェルーンが有可能だった訳ではないのだが・・・

キリーク王ヴァレリオとソフィア王女の結婚を契機にキリークの高度な機械文明がアルシュに流れ込みインフラ整備から始まって土木関係はもちろん他業種も勃興した。

アルシュ王国は高度成長期に突入したのだ。

国内が景気に沸いて庶民が王の手腕を賛美していた頃・・・フェルーン王による肅清が始まりつつあつた。

そもそも弟王子を支持していた勢力はこの王子の性格“冷酷にして愚直”に反発していたのだが、国内の支持が絶大であるこの時期にその性格が表面化した。

フェルーン王即位の時には弟王子を擁立した貴族は家族を含め全て投獄された。

それを第一次肅清とするならば、第二次肅清の始まりである。

まず最初の犠牲者は父であるシャーデル王。

あまりの急激な経済発展は国にとって良くない。緩やかな成長と国民全体の民度向上に努めると事あることにフェルーンに注意を促したのが仇となつたのだろう。

引退したにもかかわらず国政にしゃしゃりこんでくる父を宮殿の自室に軟禁し、以後一步たりとも室外へは出さなかつた。やがてシャーデル王は足を悪い床につき肺に水がたまつて亡くなつたのだ。

それからはフェルーンの思うがままに国政が動いていった。  
例えば。

国内が景気に沸いた頃、庶民の中には莫大な資産を手に入れた者が数多くいた。

その者達にその資産に見合つ<sup>印</sup>額の税金を課し、反発する者は公安局が再教育する事を徹底させた。

また、農民が土地を離れ都会に移り労働者になる事を禁止した。  
かと思えば一村一校を合言葉に全国に小学校を建築した。  
しかもその学校に入れる身分は武以上と決められたため農村に建つた学校はそのまま物置小屋となつてしまつた。

その他にも矢継早に勅令が下つた。

その内容は全て、王貴武農工商の徹底・身分格差の鮮明化である。  
容赦の無い公安の締め付けで国内景気は停滞して行つた。

そして宮廷内は・・・もつとはつきりと変化した。

以前の自由な空気はなくなり、規則重視・身分重視。

一つ上の階級の人間が右といえば右であり白といえば白となる。

そして、その一番頂点に立つてゐるのは・・・フェルーン国王である。

今や独裁者となりつつある国王。

もしフェルーンがソフィアの首を刎ねよとひとり言えれば、誰も諫める事すら出来ないので。

ソフィアはリスターが語る最近のアルシュ情勢に静かに耳を傾けていた。

そして全て聞き終わると、ちよつと困ったような顔をして一言つぶやいた。

「お兄様つたら・・・お変わりにならないわね。」

その表情を見てリスターは思い切ってソフィアに尋ねた。

「ソフィア様ならあのお方を変えることが出来るでしょうか?」「わたくしにそのような力はないですわ。」

「でも」

「エズバラン卿。フェルーン兄様がなぜそこまでやつてしまつが判りますか?」

「いえ。わたしには想像がつかないのですが・・・」

「自分に自信がないからです。」

「・・・」

「内に無いならば外の規則を・・・信じられる今のシステムに縛るしかないでしょ?」

「ではどうすれば良いのです。の方に善く国を統べていただくには・・・」

ソフィアはぬるくなつたお茶に口をつけ一口飲んだ。

「あなたは、アルシュ王国に何故500年もの歴史があるのか軽く考へているのではなくて?」

「そのような事は決してありません!」

「何故そのような事をおっしゃるのか!心外だ!」

「今ある規則はこの500年もの間、数え切れぬほどの国民が練り上げて来たものの一つの形です。そして暴君の時も賢君の時も王貴

武農工商に変わりはありません。ならば。」

「ならば？」

「（）の規則には血が通っています。窮する者を救う術が必ずあみ出されている。それも500年に及ぶ英知と共に。調べなさい。徹底的に。国を、国民を、そして吾身を守る知恵が歴史のそこそこに埋まっています。これを見つけ利用出来るのは同じ国にいる者だけです。」

「……はい。ソフィア様」

エズバルン卿はソフィアに頼ろうとした姑息な自分に赤面した。安易な道などない。ただ我々には500年の歴史がある。それを掘り出し今に蘇らせ国政に揺さぶられる国民を救うのは、同じ国にいる自分達にしか出来ないのだと・・・

ソフィアは、リスターの様子に二ヶコリ笑い言葉を続けた。  
「どんな事があろうと生き抜く事です。私がこの家を頼った事で貴方が窮地に陥り投獄されるとすれば、今のうちに逃げ道を作つておきなさい。」

「！」

「ですが、今一番シンプルでお互いの利にかなう方法は・・・あなたが私を拘束してフェルーン王の元に差し出す事です。」

「ソフィア様！我忠心を疑うのですか！？」

「いいえ。」

ソフィアは立ち上がり、エズバルン卿に向かい膝を折った。

唚然とするエズバルン卿に相対しソフィアは静かに願いを告げた。

「私を捕らえて王に直接お引き渡し下さいませ。エズバルン卿。」

元近衛師団副長といつ肩書きは歳をとり現役を離れた今でも十分に威力を発揮した。

ソフィアがサマーサを頼りエズバルンの館に来てから10日後、かつての自分の兄、現アルシュ王国国王フェルーンに直接面会することができたのだ。

宮中で一番莊厳な作りの黒の間。

それほど大きくはない部屋だが、前後左右の鉄壁に黒曜石のタイルが埋め込まれ、床はみごとな赤い大理石が使われている。

よく見ると床の四方に広めの溝が切られていて隅に置かれた彫像の裏にある排水口に繋がっている。

もっとよく見ると壁も床も縦横無尽に傷が走り不自然な装飾を作り出しているようだ。

そして左右の壁には完全武装の近衛兵が10名、彫刻のように身じろぎもせず立っている。

中央には簡素な作りのテーブルが置かれ椅子にはソフィアが座っている。

ソフィアは両手をテーブルの上に置いているがその手首には禍々しい鉄の手錠が鈍く光る。

対面に立つフェルーン王はそんなソフィアの姿をしばらく眺めていた。

やがて、ソフィアに近づくと丁寧に結い上げられた髪のピンを一つ二つと抜いていった。

その度にさらりさらりと金が揺れて落ちる。

暗い室内で艶やかな光沢を放つソフィアの髪を一房すくってその感触を確かめると、今度はうなじに手を当てやがてそれをツツ・・

と首にそつて前に滑らせた。

そのラインは斬首を意味するのか。だがソフィアの表情に変わりはない。

フェルーンはふっと微笑みソフィアから離れ、テーブルの横に立つた。

「元気そうだな。ソフィア。」

「お兄様もご健勝何よりでござります。」

「キリークで死んだと聞かされた。」

「ご覧のとおり生きております。」

卒なく答えるソフィアをしばらく無言で見つめるフェルーン。

「・・・何をしに来た?」

「お兄様に会いにきました。」

「そつか希望がかなつて何より。ではさらばだ。」

部屋を出ようとするフェルーン。

ソフィアは初めて身を起こしフェルーンに顔を向けた。

「お兄様のお役に立つために来たのです!」

「役に立つ?」

なにやらおかしな事を聞いた。

役に立つだと?

フェルーンは再びソフィアに近寄り怒号を上げた。

「おまえがキリークで馬鹿なことをしてくれたのを俺が知らないと思つてゐるのか! 最初にヴァレリオ王から事の顛末を聞かされた俺の気持ちを・・・おまえは!...」

「お兄様、どのような事を聞かされたか判りませんが、これだけは信じてください。私はあのコリカゴまで行くことが出来たのです。」

「ああ、聞いたとも。精靈王に手を出そうとしたとな!...」

「それではわたくしもはつきり申しましょう。あのコリカゴのなか

に入り精靈王に会えたのです。」

「たわけ！自慢げに話す事か！！」

「いいえ。自慢ではなくフェルーン王に交渉しているのです。」

「！？」

「この世に生きている者の中で唯一わたくしだけが精靈王と直接口  
ンタクト出来たのです。そして、わたくしはあなたの妹なのですよ  
？」

「・・・」

「精靈王の力はすばらしいものでした。あの力を手に入れたキリー  
クが発展したのは当たり前です。」

「・・・」

「わたくしはね？お兄様・・・キリークの宮殿から見えるコリカゴ  
を見て不思議に思っていましたの。たかだか100年でアルシュ国  
を追い抜きエネルギー供給の名のもと近隣諸国を配下に治めたキリ  
ークという国・・・でも、それは精靈王を味方にすれば誰にも出来  
る事ですわ。100年前はアルシュ王国の方がキリークよりはるか  
に進んでおりましたものを。」

なるほど。言いたいことはそういう事か。

「・・・我々はキリークのおかげで豊かになった。キリークの味方  
になつても敵にはならん。」

「敵になる必要はありませんわ」微笑むソフィア。

「わたくしがもう一度精靈王にお会いしてお兄様の伝言をお伝えし  
ましよう。お兄様はこの国を・・・アルシュ王国をどのようになさ  
りたいですか？」

以前リスターに向かい『フェルーン王は自信の無い王』だと評した  
ソフィアがアルシュ王国の未来像をその王に訊く。答えは出ている。  
ただその口からそれを言わせるだけの質問・・・そしてフェルーン  
は答えた。

結果、

「キリークが有する精霊王エルをアルシュ王国につれてくるよう」  
その為ならば協力は惜しまない」

アルシュ王はソフィアと密約をかわした。

そしてソフィア一行に一人の男が加わることになった。

その名はバリス・ラン・フォールゼン。

公安局環境課に所属する精悍な顔つきの男だった。

キリーク王国ルーパスに立つ白亜の館。アルシュ王国の大使館である。

その広い館の一室に5人の人間がテーブルをかこんで朝の食事をしていた。

『これが最期の食事となるかもしない！』

そう思いながらガツガツ食べているハリーをしおがねーなーと温かい目で見ているバスロー。

その向かい側では出されたものを黙々と食べるナーノと野性味のある顔つきながら何を考えているのか判らない寡黙な男バリス。

そして上手にはソフィアが座り優雅な手つきでデザートにスプーンを差し込んでいた。

いつもと変わらぬ、いつもと違つ、それぞれの胸の内。

これから3時間後にキリーク王国国王ヴァレリオと謁見する予定だ。

バリスは2日前ソフィアから直接言られた言葉を思い出していた。  
「謁見は10分ぐらいで終わるでしょう。その後は塔へ上がり精靈王に会います。」

ソフィアはすでに確定済みの事のようにきっぱり言った。

そして、自分もそれを見越して算段している。

想定内・想定外を事前に考慮し各所に根回しをしたのはいつも通り。だが心の中では聖源室への入室まで確信している。確信を持つ自分は冷静ではない・・・見落としは無いか？

表面上は機械的に食事を口に運びながら頭の中では複数のシミュレーションがめまぐるしく展開していた。

ハリーとバスローは今までこそ食事を味わう余裕があるものの、クリーク王との謁見が確定した時から自宅に戻り、あることに没頭していた。

昼夜休み無く今まで溜め込んできたゴザガラに関する研究を本にまとめて上げ全世界にいる聖骸靈錄研究者に郵送したのが昨日のこと。本にしたものも出来なかつたものも全ての収集物と資料は地元大学に寄贈し、ようやく今日の日を迎えたのだ。

今までのよう氣楽にゴザガラを追う暮らしが終わる・・・かもしない。

なんとなく2人ともそう思つていた。

ナーノは辛目の味付けをした肉を食べながら誰かが近くにいる気配に苛まれていた。

それはソフィアのような気配、だけどソフィアではない。

父・・・だらうか。もうすぐ会えるから?

「あなたの父親はヴァレリオ王です。けれど王はそう感じてはくれないでしょ?・・・貴方は精靈王の子とおなりなさい。」

まだ会つた事のないヴァレリオ王・・・写真で見せてもらつた彼の人は、金髪を後ろに流し青く鋭い眼差しと眉間に深い皺を寄せナーノを睨んでいる。

これが父さん・・・正直怖い。とても僕を認めてはくれないだらう。でもいい。僕には母さんがいる。

ナーノにとつて母ソフィアは絶対神の「」とく神聖かつ心の支えだった。

母さんがそういうなら僕は精靈王の子にならう。

そしてソフィアは・・・何も考えてはいなかつた。そう。何も!

\*\*\*\*\*

謁見の間にはいつもより多くの近衛兵が配備されていた。  
いや、謁見の間だけではない。

宮殿内部全てに準戦闘体制が敷かれていた。

5人が謁見の間に入るとそこには近衛兵だけで正面の玉座は空席のままだつた。

『こ・・・殺される?』

ハリーは傍目にも判るほど臆してバスコーの袖をそれとなく掴んだ。バスコーはそんなハリーを無視して先頭に立つソフィアの後ろを静かについていく。

ソフィアは首元から胸元まで白いレースに包まれ、そこから下は純白のサテンが腰までのゆるやかなラインを描いていて。歩を進めるたびにドレスのドレープが赤い絨毯の上でゆるやかにひるがえつた。

威風堂々。

胸を張り姿勢正しく先頭を歩くソフィアは王妃その人だつた。

5人が玉座の前に並ぶと王が入室してきた。

写真で見るより老けて見える。

ヴァレリオ王は今年40歳になつたばかりのはず。

やはり眉間の深い皺はそのままに鋭い視線は冷厳より猜疑の色が濃い。

王の入室と共に膝を折りその場に控えていた5人にヴァレリオは一瞬目を向け玉座に座ると傍らの侍従が近づき何かを耳打ちする。

本来の謁見では相手側の名前を読み上げ一人ずつ王へ紹介するのだろうがそれを簡略化したのだろう。王は頷き左手を上げて下がらせた。

しばらく沈黙が続いたが最初に口を開いたのはヴァレリオだった。

「ソフィア・・・成程、聞いていた以上によく似ている」

「私は生き返りました」

ヴァレリオは立ち上がりソフィアに近づき顎をつかむとそのまま上に引き上げてソフィアを立たせた。

しげしげと顔を覗くと顎から手を離し数歩下がってまた上から下まで執拗に見る。

ヴァレリオはソフィアの死を確信していた。

10年前に変形変色してしまったソフィアの亡骸を石棺に納めたのは自分だ。

アルシュ国王の親書が届きソフィア生還の報を受けた時には乾いた笑いしか出なかつた。

何かの思惑を持つた偽者だと・・・だからこそ直接謁見することにしたのだ。

「エルの力か?」

「ええ・・・それとあなたの力です。」

「わたしの?」

「貴方がわたくしに会いたがっていたのです。」

「王の顔がぐしゃりとゆがんだ。」

「は・・・ははは、馬鹿な。君になんか会いたくもないし顔も見たくない!ましてや生き返つてなぞほしくもない!・!・」

「私にはわかります」

「では墓に帰つて静かに眠つてろ!」

王は剣の柄に手をかけようとした。が、ソフィアは臆せず祈るよう手を組んで王に近寄つた。

「私を塔に。」

「エルか」

「ええ」

「あれをどうするつもりだ」

「本來あるべき所に戻します」

「今はここにあるのが本來の姿だ。あれなしに我々は生きていけるか！」

「それはあなたの都合でしかないわ・・・精靈王の言葉を聞いて。」

「精靈王の言葉！？」

ソフィアは王から離れナーノに立つよう促した。

10歳ほどの品のいい少年。

その姿は中央塔に閉じ込められたわが子と面影が似ている…エルが乗り移つていてるとして閉じ込められたままのわが子に。

「私が地に下りた時に生まれた貴方と私の子よ。」

「・・・・・・・名は？」

「ナーノ。」

「ナーノか。人か精靈か？」

「人です。」

初めて聞いたナーノの声は少年らしい少し高めの声。だがそれはすぐに変わった。

「全ては変わる。螺旋を描いて・・・」

精靈王エル。

王は総毛立ち後ずさつた。が、すぐに背筋を伸ばし田の前の子供をねめつける。

「我々も着々と変わっています。ここ数年の進歩は田覚しいもので平均寿命も毎年伸びている。幼児の死亡率に至つては1桁の数字です。産業・工業・医療すべてがこの数年でどれだけ向上したか。」

「その変化はまもなく終わる。おまえのために螺旋は上へ駆け上が

つた。そしてその回転は内へ向いている。」

「何を…我々はこの地上に平和と安定をもたらします。それまで進み続ける！そのためにはエルの力がどうしても必要です…・・・あの力が無くなればまた貧困と疫病におびえなくてはならない。私がこの国の人々にそんな生活をさせられると思うか？」

「あなたの望みと我望みは違う。王は国を見ているが私は星を見ているのだ」

「視野が狭いとでも言つつもりか…・・何と言われようとかまわん！」

王は右手を上げた。

それは全ての牙への合図。

王に忠実な戦士たちは一斉に5人に襲い掛かった。

## 第十五章（前書き）

一応おじとねりしておきますが、非常に生臭い話になつてます。

## 第十五章

バリスは反射的に服に仕込んでいた武器を取り、襲い掛かる近衛兵に備えた。

想定内の展開。

だが。

「！」

爆風と轟音がバリスの鼻先をかすめていった。

今しも襲いかかるつとしていた近衛兵が一瞬のうちに天井まで巻き上げられ空中でそのまま四肢を引きちぎられていく。

壁際から5人に向かい剣を振り上げた姿勢のまま近衛兵達は次々と空中に舞い、悲鳴を上げる間もなく部屋中に散つていった。

謁見の間はたちまち疾風による粉碎場と化し金属が舞い上がりこすれあい拉げる耳障りな高音と肉が引き裂かれる粘液の音がこだまし、天井から近衛兵の洗練された軍服とローブの切れ端が舞い落ちた。後ろの壁から始まり両脇の近衛兵を撒き散らした嵐はたちまち王へと辿り着き、凍りついたように立つて王のローブがふわりと浮いた。

と、突然ソフィアが王のもとへと走り腕をひろげ、その首に抱きついた。

ソフィアが王に何かをつぶやいたその瞬間、王の首から下が捺じ切れ弾け部屋中に四散した。

『血狂風・・・』

バリスの脳裏に一つの言葉が浮かんで消えた。

\*\*\*\*\*

王死す。

謁見の間、無残に砕けた玉座の上に王の首がぽつんと乗っている。その周りには無数の引き裂かれた肉片がまるで赤い花のようにならんで床に散っている。

多分、いや間違いなくその誰もが自分が死んだ事さえ気が付いていないだろう。

全ては一瞬にして起こり一瞬にして終わつたのだから。

\* \* \* \* \*

5人はソフィアとナーノを先頭に塔への廊下へと向かつた。途中で警護しているはずの衛兵もやはり、拉げ潰されて見る影も無い。

塔への廊下の突き当たりにあるエレベーター前の守護天使はまるでソフィア達を待つてゐるかのようにドアを開けたまま佇んでいた。ゆっくりと昇つていくエレベーターの窓から眼下を望めば首都ルーパスの景色は、10年前と変わらず平和な活気に満ちていた。

エネルギー源隔離施設” ユリカゴ”

廊下をぐるりと周ると、鋼鉄の扉が立ちはだかつた。だが、その扉にはほんのわずかな隙間がある。

バリスがナイフを差し込みゆっくりとスライドさせる。

と、内部には作業服姿の男達が白衣を着て椅子に座つてゐる研究員の後ろに立つており、一斉に5の方を振り向いた。

作業服の一人が進み出て5人に向かい無言で敬礼を送つた。

5人の中からバリスが進み出てやはり無言で返礼する。

残つた4人はその様子を呆然と見てゐるだけ。

バリスは振り返りやはり無表情のままソフィアに向かつて優雅なお辞儀をした。

「ソフィア様。キリーク王国制圧及びコリカゴ奪取は最小限の被害のうちに終わりました。偏に貴方の功績でござります。」

「・・・」

「ソフィア様にはもはや精靈王に直接交渉していただく必要もなく、このまま地上にお帰り頂き今後のアルシュ王国発展の様子を楽しんでいただきたいと思います。」

ソフィアはその言葉を無言で聞いていたが、傍らのナーノの手を取ると躊躇無く部屋の奥の螺旋階段・聖源室へと向かつた。

バリスはすれ違うソフィアの右腕を掴み引き止める。

「どちらに行かれる！出口はあちらです。」

ソフィアは軽く首を横に振りバリスに微笑んだ。

「いけません。」

「？」

「お放しなさい。」

「出口までエスコート致します。」

バリスはながば強引にソフィアの肩に手をかけ反対方向を向かせる

と腰に手を回した。

「！」

ピリツと静電気のようなものが2人の間に走りバリスは反射的に手を引いた。

その隙にソフィアはナーノをつれて聖源室へと駆けてゆく。

途中にいた作業服の男達が手を出してはビクッと引っ込めているのはやはり同じように電気に触れたような痛みを感じたからだらう。

「殺せ！」

バリスの怒号と共に近くに居た男がナイフを手にソフィアに襲い掛かつた。

ナイフがソフィアのうなじを突きその刃先は確実に脳を貫いた。

手ごたえに笑みを浮かべてその刃を引き抜く男。  
ソフィアはそれに引きずられるように後ずさった。

「母さん！？」

ナーノの声が広いフロアに響きわたった。と、同時に何かが光った  
ソフィアの傷から光が噴き出しナイフを握った男は一瞬のうちに炭  
と化した。

「！」

バリスもそれに巻き込まれるといつだつたが一瞬ゆかを蹴つて身を  
庇つ。

「・・・行きましょう。ナーノ。」

ナーノはちょうどソフィアの前で庇われるよつに抱かれていたため  
後ろがどうなつたかなど知る由もない。  
が、繋いでいる手から力が消えていくのを感じ、母を引き上げるよ  
うに螺旋階段を上がつていく。

「くそつ！」

バリスは傍らに立つ男から剣を奪つとソフィアの後を追つた。

## 第十六章（前書き）

後半に長々と天災の話が続きますので滅入る人はスルーして下さい。  
後書きにこの章のあらすじを書いておきます。

バリスは剣を片手に階段を急ぎ登つたが2人の姿は無かつた。

そして聖源室の入り口はちょうど人が一人通れる程度に開いている。

『ちつ』

バリスが気配を殺して中に入るとなじうど右側にソフィアが立つており、あわててこちらを振り向こうとしたところだった。間髪入れず剣でなぎ払うとソフィアはそのまま円形高圧場へと叩きつけられ高温のシールドから蒸気が噴出した。

「…………！」

悲鳴にならない絶叫が同時に起ころ。

10年前の奇跡は起きず、そこには半身シールド内に突き刺さった哀れな女がいるだけだ。

だが、彼女はまだ生きていた。腕だけでエルへとにじり寄つて行く。その唇は何かをしきりに呴いていた。

もし聞き取れる者がいたならばそれが人の名と知るだらう。

「アルフィード……」

10年前、懷妊を知つたヴァレリオがソフィアの手を握り「絶対男だ！名前は……アルフィード！」と顔面総崩れの笑顔で命名した名前だった。

ソフィアの指先がエルの額に触れるとエルは眠りから覚めたかのように薄く目を開き身じろいだ。

がくがくと震えが起こり横にすべり落ちたソフィアの手をすぐに彼の手が握る。

ソフィアはその手を握りかえした。

エルは……アルフィードはもう一度強くソフィアの手を握つた。

だが、もうその手が、指が、そしてわが子を見つめるその瞳が動く

ことはなかつた。

ソフィア絶命。

フィールドの外では逃げ回っていたナーノがバリスに追い詰められたところだつた。

部屋の隅に逃げ込んでしまつたナーノに剣がかざされたその時、聖源室の中の光源が落ち全てが闇に包まれた。

それでもバリスにとつてすでに瞬殺する用意は完了していた。

躊躇無く剣先はナーノの心臓に向かつていつた。

少し考えれば聖源室で光源が消えたという事が何を意味しているか気がついただろう。

それはエルを閉じ込めていたシールドからの光が消えた・・・つまりシールドが無力化した事を意味していた。

だが、バリスは余りにも暗闇で人を殺めることに慣れていた。  
暗いからどうだというのだ。

闇は俺に有利だ。

静かにくたばれ。

だが。

「――――――」

そこにナーノはいなかつた。

力を込めた剣の切つ先が柔らかな壁に抵抗無く刺さるとその勢いのまま壁が崩れ落ちた。

こちらを睨んでいた獲物はもちろん、その奥にある壁もその外にあるはずの建材も何もかもが総崩れとなつてバリスは身を立て直すことが出来ないまま橜円体の中を落ちていき、やがてその外壁をも突き破つた。

そしてそれを合図にユリカゴは大音響と共に爆発をおこしたのだった。

どこまでも青く澄みわたり雲ひとつ無い晴天の日の日。

城は血に濡れ、宮殿内は混乱した。

そしてそこから1km上空で銀色に輝く橈円体、通称“ユリカゴ”それが何の前触れも無く吹き飛んだ。

中央塔はグニャリとひしゃげ、その衝撃音はキリークの領地全体まで鳴り轟いた。

空は一転にわかに搔き曇り、黒い雲が何処からとも無く湧いては空を覆つてゆく。

最初はぽつぽつと降つた雨がすぐに豪雨と変わつた。

そよりも風が無かつた街にヒュッと突風が吹きぬけ、それを合図に激しい風が地表を駆け回る。

勢いを増す黒雲から雷鳴が轟くと共に雹が降り地上を白く塗りつぶした。

首都の路地はすでに川となり白い雹を浮かべて暴風にさざなみを立たせている。

そんな中、中央塔の上空、ユリカゴだった物の上だけはポツカリと青空がのぞいていた。

その中に小さな小さな人影が2つ。

妖精王は今や中天にあり、地上を表情もなく見下ろしていた。

そして、その右手に少年がすがりつく。

「エル！やめて…！」

「

「みんな死んじゃう・・・やめて！」

「我に止める力は無い・・・精靈王として我精靈達を守る力は・・・  
もう・・・我はこの100年で千年分も歳老いてしまった。」

「エル」

「我分身にして我敵よ。」

エルはナーノを見た。

「おまえだつてわかるだろう。我に王の力は有りず・・・もうこの  
地上の精靈たちを止める事は出来ない。」

「うそだ！あなたは人を憎んでいるんだ。いいように使われてきた  
から・・・」

「我が人を憎んだのではない。人が我を憎んだのだ。」

そう言つとエルの姿は風の中に焼き消えた。

一人残されたナーノは天地に入り乱れる精靈達の狂宴を見た。

そして地には右往左往している人の群れ。

眼下の惨劇を見たくないと目をつぶればその眼ははるか彼方まで全  
てを見通した。

逃げ惑う人々、口々に呪いの言葉を吐き、助けを求め、とにかく目  
の前の災厄から逃れようとする者達。

今まさに風に叩きつけられ大地に吸い込まれ海に飲まれ火に焼かれ  
絶叫する人間の姿。

そして天に向かい投げかけられる人々の祈りと怨嗟の声に耳をふさ  
ぐ事も出来ず、ナーノはぐらりと空から落ちた。

「ありがとう！！」

「た・・・助かつた！コザガラ様によろしく！」

地上のある建物の上ではバスコーとハリーが空に向かつて手を振

つていた。

その先には風に翻られながら飛んでゆく2羽の鷹。

ユリカゴが爆発すると共に空中に投げ出された2人を待っていたのは強い上昇気流だった。

落ちては行くがゆっくりで気圧差からも守られているらしく耳鳴りひとつしなかった。

2人は口にこそ出さないが“これは童話で読んだアレだろ！”と確信していた。

やがて地表が近くなると大きく立派な鳥が近づいてくるのが見えた。そしてついにハリーが一言

「うわあやつぱりコザガラ様だ！」とつぶやいたのだった。

童話どおりにその羽ばたきに合わせて手を伸ばすと大きな鷹がしつかとその腕をつかみ2人を地上に運んでくれた。

階段を降りて建物から出でみると、道路の水が川となつて低い土地へと流れていくのが見えた。ここは山手、首都ルーパスの中でも洗練された中流階級が住む街だ。

「おい！あれ！！」

バスコーが目ざとく何かをみつけ指差す。

その向こうに空から一直線に地上に落下していく黒い物体を見た。

「行こう！」

2人とも躊躇することなく走り出した。

「ナーノ！」

ナーノは誰かが自分を呼んでいる声に気がついて目を開けた。

バスコーとハリーが心配げに顔を覗きこんでいる。

宮殿から1kmも離れていない芝生の庭園にナーノは倒れていた。あちこちに地割れがおき、芝の縁に黒々とした土がいくつも横切っている。

柵の側を流れる小川は今や濁流となり音を立てて土を削る。

「ナーノ？起きれるか？山手の方に行こう。ここは地割れがひどい。

「もうダメ・・・もうこの地上の生き物も逃げるとこには無いんだ。

「なに弱気なことを言つてるんだ。さあー！」

ハリーがゆつくりナーノの身を起し怪我がないかどうか確かめつつ身体をさすつた。

「どこに行くというの？この天災のあとに何が来るか知つているの？寒波と干ばつがやつてくるんだ。木は枯れ砂漠が広がっていくんだ…」

「もしそうだとしてもなあナーノ。」

「や、あんたはまだ生きてるー。」

「・・・」

「ほひ、バスローにおぶされ。手を離すなよ。いくぞー！」  
3つの影がひとつになつてぐずぐずに崩れしていく地表を駆けていった。

精靈王は解放された。

キリーグ王国は一夜にして崩壊した。いや、キリーグだけではない。キリーグで発生した異常気象はたちまち周辺諸国を襲い、全世界が荒れた。

ナーノはノサッポへと戻つてきただが、ひどい日照りが20日も続き地に縁はなかつた。

「ディー様を村から出したのが間違いだつたなあ・・・

「村長は何かにつけそうつぶやく。

村の中には土地に見切りをつけ出てゆく若者が出てきた。手入れさ

れない田畠は荒れ、害虫が発生していった。

それは何もノサッポだけではない。人は飢えに迫られるように地上を徘徊し、どこかに留まり、どこかへと流れた。

## 第十六章（後書き）

あらすじ：

パリスはソフィアの後を追い聖源室でついに彼女を討つた  
しかしソフィアはエルまでたどり着き、ついに精霊王はシールドから自由になった。

精霊王エルは解放されたがこの100年の間に衰弱し、精霊達は道  
理を失して暴走し、その結果もたらされた天災はキリーク王国に留  
まらず全世界を蹂躪した。

## 第十七章（前書き）

え～・・・

エネルギー問題をいろいろ聞かされて嫌になつてゐる人は後半からスルーしたほうが良いかと思います。

後書きにこの章のあらすじを書いておきます。

一八章は普通にファンタジーします！

「バスローーめしだぞ———」  
 「やつとか・・・腹がねじ切れそうだ。どれ。」  
 「・・・どう?」  
 「どうして? うまじよ」  
 「———い—— ふむ?  
 「・・・・・・・・・・・ そつか。良かつた。」  
 「あ、もしや、テメー! 僕を毒見に使つたな! ?」  
 「考えすぎだよ。バスロー。」  
 「いや、おまえはそーゆー奴だ!」  
 「人聞きの悪い」  
 川原で名もない雑草といやに色が鮮やかな虫の煮込みを食べる男<sup>2</sup>  
 人。

かつて滔々と流れていた清流は今は枯れ果てて、雨が降つた時のみ  
 かつての名残を見せる。

「ゴザガラいると思つうか?」  
 「いる」  
 「根拠は?」  
 「山の精靈はそこから離れない」  
 「ではちよつと質問変えよ! うか。ゴザガラは生きていると思つうか?」  
 「・・・生きるの定義は?」  
 「うつ・・・意思がある、かな?」  
 「死んでるかもなあ・・・そつなると精靈の死の定義は意思がなくなる  
 ?」  
 「いや、死んでいるとしたら、草も木もないだらう。と、すると。  
 生きるの定義は・・・生きているものがいるという事かな・・・  
 バスロー。お前、それ言語的におかしいだろ。」

そのまま川沿いに上流まで歩き、やがて陽が落ちた。川原の石は土に半分埋もれ凹凸が激しい場所ばかり。巨大でなめらかな岩の上にテントを張った2人は仰向けになつて空を見上げた。

彼らは相変わらず「ザガラ探求の旅をしていたのだ。

「ナーノは精霊王だったのかな？いや、ちょっと違うか。宰相ぐらい？」

「どっちにしろ精霊とは違うだろ。もしそうならエネルギー源として狙われるはずだ」

「それは論理のすり替え。狙われるのとナーノが精霊だというはイコールじゃないし」

「いや、案外そういう事で闇組織にでもさらわれたのかもしれない。」

「そうなると・・・探し出せないな。」

ナーノはノサッポに一度戻つたものの1年も経たずに村を出たという。バスコーは川原から拾つた小石を目の前で透かすように見つめてため息をついた。

「この小さな石の精霊に行方を訊いても駄目かな」

「相手が強い精霊じや、市井のちつちつ精霊なんて知らないんじやないの？」というか、そもそも人間の俺たちと会話できないんじやねえの？」

「コザガラだつたら知つているだろ？」・・・

その夜、2人は夢を見た。

2人が眠る巨石が川原から離れ宙を飛ぶ夢を。上から夜の地上を見るとあちこちに小さな光が見えた。

騒乱の炎ではない。それはささやかな暮らしの明かり。

それはかつての夜を欺く狂乱のネオンと光の渦を知る者としては余りにもささやかなものだった。が、今はそれが地上にあると知り心の底からうれしさがこみ上げ、2人の頬に涙が流れ落ちた。

朝、目が覚めても2人は無言のままテントをかたづけ予定の山道を登つていった。

小一時間も歩いただろうか、ハリーがぽつりとつぶやいた。

「バスコー・・・夢見た?」

「ああ」

「俺達、希望持つていいんだろうか」

「ああ」

「そつか

ただそれだけの会話だった。

3時間後

もつと登ろうと予定していた山道は深い笹藪の中に埋もれていた。

もはや誰も手入れしない山道。

誰も登らない靈山。

精霊王エルの解放と共に地上を蹂躪した天災のあまりの激しさに、人は自然をむやみに恐れるようになった。自然を愛でる事すら自分の原罪とばかりに、山奥や秘境はもちろん近くにある森林にさえ踏み入る事をやめた。

その為の道を、今後登るであろう人の為に維持してあげよ!という気力はもはや無くなってしまったのだ。

そればかりではない。

自然を生活に取り入れ自然と共に生きる事すら後々報復を受けるのではないかと・・・そう。

精靈王エルを一つの所に閉じ込めその力をエネルギーにしたキリークの傲慢。

その轍を自分が踏むのではないかと恐れ、巨大エネルギー創出への探求をやめた。

たとえそれが出来てもやらないでいこうという風潮が蔓延したのだ。全世界的なその流れに工業は軒並みその技術を錆付かせた。ささやかな電力事業が雨後の筈のように地にあふれ、それを使用できる者と出来ない者の差が現れた。

特に顕著に差が出たのは情報端末で、一部の特権階級だけが使えるようになり真の情報はベールの奥に隠された。

出処のあやふやなニュースを街角のテレビが騒ぎ立てればそれを検証できない市民は言われるままに右に左に踊った。

それを持た二ニュースが取り上げ虚実に事実がコーティングされていった。

## 第十七章（後書き）

あらすじ：

久々にゴザガラ探しでシャール渓谷まできたバスコーとハリー。  
そこで巨大岩の上にテントを張り一泊することにした。

その夜、荒廃したと思われた地上にささやかな暮らしが始まつた。  
ある夢を2人同時に見た。

次の日ゴザガラがいる靈山に登ろうとしたが結局かなわず旅は終わ

## 第十八章

れて。

そんな中、画期的なおもちゃが発売された。

「精靈と会話しちゃおう~」**ミコヘル**

一見小さな拡声器である。会話したいものに専用のピタツとシールを付けその先にあるイヤホンを自分の耳に。そして特製拡声器を向けて話しかけるのだ。

すると、石でも草でも話をしてくれるといつ。

最初に買ったのは・・・大人たちだつた。

子供時代に沢山のおもちゃに取り囲まれ、高度な文明の中で育つた大人たち。

面白いものには無意識に飛びつくといつ習慣がまだ失われていなかつたのだろう。

そして、このおもちゃが非常に性能が良かつたため爆発的に売れた。

例えば、拾つてきた小石におもちゃを試してみたら、自分はこの土地の出じやなく隣の県の×山から来ましたと答えたといつ。そして、エル開放の時には自分も怖かつたと。でも今はみんな落ち着いてきているから心配するなど励ましたとか。

また庭の草に話しかけてみたら、明日からしばらく雷雨が続くから用事があるなら今日中にやれとまで教えてくれたといつ。

会話の中で出てくる天気の予言は特に的中率が高かつたので、それも粗まつてヒット商品となつたのだ。

「社長。お茶をどうぞ」

「ああ」

社長室で事務机に座りながらお茶を飲む男が一人・・・ハリーだ。社長室といつても8?ほど。社長の机の前に応接間セツトという名の丸テーブルと簡易椅子が置いている。

爆発的売れ行きの「ミコ エルであるが社屋は貧相のまま、ただ工場だけが設備改善・投資されていった。そして今、自主発電装置を敷地にぶち立て安定した電圧で100%まかなつている。そのシステムの基礎となつているのはアルシユ王国の古い文献に記載の天然ガス利用方を基にしたものだ。

かつて”ユリカゴ”ではエルから流れ出てくる雷による放電を自在に操り、安定した電気エネルギーを全世界に供給していた。その莫大なエネルギーから見るとほんのスズメの涙ではあるが今の設備には十分なものだつた。

机の上の電話が鳴つた。外線から直接つながつたようだ。

「おう!バスコー!そつちはどうだ?」

ハリー社長はでかい声で話す。

今、バスコーは”自然に学ぼう”ツアーフェスのためかつてのキリーグ王国に来ていた。そこにはぐんにやりとひん曲がつた中央塔の姿。将来への警告のためとか何とかで、撤去されないまま歪んだ姿を晒している。

つまりは撤去作業の費用も技術も無いのだ。

「あー。とつても良い保存状態だよ。今、王宮の入り口だけひどい有様だ。」

「え?掃除とかしてないの?」

「埃や塵はさすがに無いけど建物のヒビはそのままだ。」

「それを残しておくことに意義あんのかね?」

「まあ・・・台風が10回も来れば確実に崩れるね。」

「結局の大爆発でも王宮は吹き飛ばなかつたんだもんなあ・・・」

感慨深げなハリーの声が受話器から漏れた。

「エルの思し召しかね。」

「んにゃ。とにかく早くそこから遠ざかりたかったんだろ。」

「そりゃそうだ……で、ツアーにここを組み込むのは無理だ。来るまでの道がつらい。」

バスニーにしては珍しく嘆くような声。

「つりじ? テコボコすぎて乗り物酔いしそうなのか?」

「違う。あまりに文明臭が残りすぎて。爆発前を知らない奴なら何も感じないかもしれないけどね……つらくて見てられないよ……あの壯麗で華やかだった王宮通りが入っ子一人いない廃墟だ。」

「そうか……ま、我々もドリじゃないから、そういう事なら首都めぐりのルートは却下ね。早くこっちに戻ってきてな。今日、浜の漁師さんからアマイカ2ハイもらつたんだ。」

「なんつ……そつちに帰る頃には無くなってるだろ! それ!」

「予定は……あつ10日後だったね。とつとく?」

「いらんわ!」

「で、コノコノルの結果はどうだつたんだ?」

ハリーの声がシリアスになる。

ツアー企画下見は二の次で本来の目的は、エルが閉じ込められていた塔と王宮でその場にある自然のものに宿る精霊と会話する為だった。

「言葉として拾うのがかなりむずかしい。泣き声ばかりだよ……見捨てられたと言つてはいる。」

「……わかった。」

その後は、靈山と聖地の話に移り無事に帰るよつとお決まりの文句で電話が切れた。

久々にコザガラ探しに出掛けたあの日。

彼らはコザガラに会うことはついには出来なかつた。

だが、帰宅途中であることに気がついたのだ。

『俺たち2人ともあの巨大な岩に出会つたじゃないか!』 と。

2人は後日装備を整えて再び巨大岩に会いに行つた。そして、会話とも言えないが意思の疎通ぐらいたは出来ると確信したのだ。

それとは別に気象 チガイの友人から天候に関する膨大な資料をもらい、異常気象後の天候変動予測システムをインプットした簡単なチップセットを作り出した。

それらを組み合わせて出来たのがコニュ エルである。

身体があるところのは、はなはだ煩わしい事よ・・・

エルは手にした白い布きれをもてあそびながら思つ。

この思考するという行為もこの身体にひきずられての行為。どうすればこの肉体から解放されるのか・・・

あの入間、ナーノにもう一度会いたい。

我と同じ肉体がこのよどむ状況に変化をもたらしてくれるはずだ。どうしたことか、どこに居るのかがわからない。

わからない・・・

\* \* \* \* \*

ルーパスからハリーに連絡し終えたバスローは、宮殿の入り口に張り巡られたバリケードを眺めた。

『入れないな。こりや。』

今度何時来るか判らない。あまり居心地の良いものじゃないがきつちり見ておきたい。

バスローは宮殿の横に回つて高い塀が延々と続く道を歩いてみることにした。

多分この季節であればそこには緑が生い茂り花が咲き乱れていた事だろう・・・

ああ・・・つらい！

この想像力は邪魔だ！

もともとこうだと思い込め！

これはこれは・・・壁が崩れていらつしやるじやないか。しかも大きな亀裂あり。

# 俺でもいける！

崩れた外壁にはロープが張つていたがそんなものは目に入らなかつた・・・事にして、バスローはずんずん中に入つていつた。

外壁はもがき、窓の壁まで大きく穴が開き、銅色の破片が地面のあちこちで光っていた。どうやらユリカゴの外壁が落下して直撃したのだろう。

富殿の中に入ると、バスキーは荷物の中から懐中電灯を取り出した。

カツツ・・・カツツ・・・カツツカツツカツツカツツカツツカツツ  
靴音がやけに耳に付く。いつそタップでも踏んでやろうかと思ひながらバスコーは北の廊下を歩いていた。

れ階段が降りて いる。

右に進むとやがて庭に出た。

全ての花は枯れ果ててその上にヨリカ子の残骸が突き刺さっていた。  
なんという寒々とした芸術作品だろう・・・バスローは荷物の中に  
仕込んだカメラでこつそり撮影した。

そこは使用人専用の裏廊下らしく、壁の造りも簡素で実用性重視とありあり判る。

バスコーは手近にあつたドアを開けてみた。小さな食堂である。次のドアは？うーん・・・庭への抜け道と見た。

バスローは次々と開け、あるドアを開けて固まつた。

そこは謁見の間だつた。

バスコーはしばらく入るか入るまいか思案した・・・が、何も考えずに行こう！と考えドアの中に入つていつた。

床を赤に染めた近衛兵達の死体も、壮絶な死を迎えた王の亡骸もすでに部屋には残つていない。ただ・・・砕けた王座だけがあの時のままだつた。

バスコーは王座に向かい身を正し喪の礼をした。

バスコーは、自分が12才の頃にテレビで見たソフィアとヴァーリオの壮麗な結婚式の様子をふと思い出した。

どちらも王の血を継ぐものとしての威厳をたたえ、若さと気品に満ちていた・・・このような最期を迎えると誰が想像しただろうか。

バスコーは流れそうになる涙をこらえようと天井を見上げた。

「…………！」

腰が抜けました・・・

何も考えられません・・・

天井にはナーノの死体があつた。

バスコーは柄にも無く氣絶してしまつたらしい。

すぐに覺醒し、上を見ないよう這うように謁見の間を出るとエントランスルームまで続く長い廊下に出た。

そこは窓に板が張られているものの漏れた陽の光が床に柔らかな明るさをもたらしバスコーを冷静にさせた。

・・・どうする？

心臓がバクバクしている。軽いショックでも死ねそうだ。だが脳は、いろいろ知りたいから引き返せと言つていい・・・

・・・・・ま、俺って心臓強いし。

バスコーはもう一度謁見の間にもどつた。

天井に懐中電灯を向けると確かに子供の身体が天井に張り付いている。

庶民のような服を着て下に向かつて恐怖の表情をうかべたまま天井に張り付いている。

・・・だが、それはどう見てもリアルなだけの石像だつた。強いて言えばナーノに似てゐるといえるが・・・

ふい・・・・長いため息をつくバスコー。

・・・焦つて損した。

バスコーは荷物の中からコノコノ エルを出してシールはそのままにイヤフォンと拡声器を使って話しかけてみる。

「もしもし? ナーノ?」

・・・反応なし。うんうん。そつだろうよ。

バスコーはついでとばかりに謁見の間にある石いりや布を片つ端か

ら「ミコ ハルにかけてみた。

やはり嘆きの声ばかりである。

そして、これを最後にしようと決めてピタッとシールを碎けた玉座に張り付けた。

「こんにちは。僕の声が聞えますか?」

「・・・・・・・・・・・・

雜音が多い。ミコ ハルに付いているチューニングをいじつてみる。

「もしもし?」

「ガガガ・・・グウ・・・ウウウウ」

あつ？ えつ！？

バスコーは瞬間に玉座から飛び退つた。

ミコ ハルのシールはそのままにイヤフォンは耳から抜けて玉座に当たりカツンと軽い音を響かせた。

と、玉座の周りがぼやけて見える。細かい砂埃が玉座を取り巻き、床が細かくゆれている。

椅子に取り残されたミコ ハルのイヤフォンが跳ねた形で石になつていた。

石化の力。

強力な地の精靈がここにいたのだ。だからあのバリケードだったのか！

では頭上にある子供の石像は・・・

突然バスコーは玉座のほうに走り出した。そこはもう砂が天井まで舞い上がり向こう側が見えない状態だったにも関わらず・・・だが、バスコーは自分の勘を信じた。

バタン！！

勢い良く木製のドアが開いてバスローは質素な木造の廊下に転がり出た。

後ろの謁見室で何かが天井から落ちたような派手な音がして思わず「ナーノ！」と、叫んだが、勿論助けに行く事など出来はしない。バスローは猛烈な勢いで廊下を駆け抜けた。

他より床下が一段高い北の廊下に入ると足元から立ち上がる妖気が弱まった気がした。

少し余裕ができたので歩調を緩めて壁の裂け目に向かう。まずい状況だ。生きて帰れる気がしない。

ハリーに繋がるかどうか確かめるべく長距離レシーバーをオンにしてみる。

中継機材を積んだ車とは距離があるがどうだろう・・・

「もしも〜し」

反応は無い。

レシーバー片手に壁の割れ目からよじやく富殿の外に出た・・・とたにヒコンと風が駆け抜けた。

「うお！」

咄嗟に壁にピタッと張り付くとつむじ風が ヒュルン ヒュルンと駆け抜けて行く。

姿勢はそのままで目を風上に向けてみれば風の壁が向こうからやってくるのが見えた。

すぐに壁の割れ目に戻ろうとしたが壁にかけた手が急にガクンと抵抗した。

見ると左手が石となつて壁に同化している・・・ぞつとして右手の力が抜け・・・

手にあつたレシーバーが地に落ちてバシッという音と共に青い光を放つた。

ありえない・・・が、バチバチと放電し続けている・・・精靈!?

左手の石化で壁に貼り付けられたまま、風の壁が近くまで来た時、

バスコーは己の手首が砕け、手だけがここに残る様を想像し恐怖のあまり絶叫した。

「たすけてくれー！コザガラ様ーーーー！」

耳がキーネンと鳴り体中に稻妻が走った。

身体が激風に飛ばされ宙に舞い左手に激痛が走った。

もしバスコーに精靈が見えたなら、自分が強大な風の精靈・地の精靈・そして雷の精靈に取り囲まれていては戦慄ただろう。

この精靈たちは他とは違う特徴を持っていた。

それは精靈王の身体から抽出され人為的処理で作り出されたエネルギーのよどみ・・・言つてみれば自然界の精靈と人工操作のコラボレーションで創造された異端の精靈だった。

それがあの日、ユリカゴの制御から開放され、もちろん精靈王エルの制止など訊く筈も無く、パーシブをはじめキリークをその周辺諸国を全ての精靈を巻き込みながら蹂躪していったのだ。しかし結局自然界のどこにも居場所はなかった。最高テクノロジーの残骸の中や建物の中・・・とりわけキリークの宮殿内には強大な精靈達が淀むように棲み付いたのだ。

宙に持ち上げられたバスコーは急に失速し地面に落ちていくを感じた。

しかも地面は波立ちそこから水晶のように鋭い突起物が突き出て来るのが見えてしまった。

「ぎやああああああああ」

\*\*\*\*\*

「？」

バスコーが目覚めると、そこは美しい森の中だつた。空には白い雲がゆっくりと流れ、地面には丈の短い草や花が咲いてゐる。

周りには縁したたる灌木がサワサワと優しい音をたて、遠くから小鳥の鳴き声がかすかに聞えた。

あー・・・死後の世界か。

呆気ない幕切れだつたな俺・・・あああ左手、こんなになつちやつて・・・死んだ後でもなんとなく痛みがあるのはまだ死んだばかりだからだろ？

ハリー、俺の遺体を捜しにあそこになんか行かないでくれるといいんだが。

バスコーは立ち上がると以前読んだ“死後の心得”といつ本を思い出していた。

あの中では確かそのうちお出迎えの人があるとか書いてあつたような。

その前に自力で川を探してその上流に向かわなきゃいけなかつたかな？

バスコーは近くの小川をたどつてやがて大きな川にたどり着いた。

「あれ？ ここ・・・」

川に出て視界が開け遠くの山が見通せた。

見覚えがあるぞ・・・というかあれはトンガリ山？ ここシヤール渓谷の下流じゃないか！！

川の水がジャバツとはねた。

水量がもとに戻っている証拠だ。よかつたなあ・・・と思つたつかの間。川の水が噴水のように立ち上がり人の形を作り出した。

精靈！！

バスコーは逃げ出そうとしたが「コザガラの使いですが！」といわ  
れて立ち止まつた。

使いは使いだけだつたようで、とにかく渓谷まで行くよう指示だけ  
すると、また川の流れに戻つていつた。

えー俺、重傷者なのにい？（見た目ほど痛くないが）

バスコーは片手でヒイヒイいいながら夜になる前に見覚えのある場  
所 以前出会つた巨大岩までたどり着きホツとして小休止・・・も  
とい爆睡してしまつた。

濃藍が空を覆い、満月がおぼろに天空を照らしている。

バスコーは人の声で目を覚ました。

大勢の声が聞こえた気がしたが近くにいるのは2人。

一人は老人もう一人は青年。

なぜかどちらも見覚えがある・・・老人はコザガラだがその対面に  
座つている人物は誰だろう？年の頃なら16・7か。かんたんなロ  
ーブを着ているが月光に映し出された顔は高貴にして秀麗。

この年の子で知合いは聖骸錄関係しかいない。だがこんな貴族顔の  
奴なんかいないし・・・こいつ誰だ？

バスコーはゆつくり近づき、2人に挨拶をした。

どちらも目礼を返しただけで再び2人で会話しだした。  
しかたがないので2人の近くに佇むバスコー。

大勢が話しているように聞こえたわけだ。2人の口からはまったく  
別人間の言葉が次々に出てくる。

まるでラジオだ・・・こんな事が出来る時点で人じゃない。  
そもそもコザガラの方が少し控え気味に見えるんだが・・・あつ！  
よつやくバスコーはその青年が誰か判つた。

妖精王エル・・・！

そりや見たことあるわけだ。

我らがヴァレリオ王とソフィア王妃の御子。

もつと正確に言つとこの2人の間に出来た御子に乗り移つてゐる精

靈王エル。

美しくない訳がない。

ナーノも成長すればこうなるのか・・・だがナーノは死んだ。石となつて・・・

バスローは自分の左手をしみじみと眺めた。

肘の関節から前腕の中央までは肉体のままだが、その先は徐々に肌色の大理石になつてゐる。そして手首の下で砕けてその先からは無い。

断面は赤と白と肌色の小さな結晶がザキザキと突き出でているのだ。

『生活に窮した時には見世物小屋でアルバイトでもいけるレベルだなあこりや。』

どこまでいつても陰鬱とは無縁のバスローであつた。

さて。

目の前で複雑な会話が続く中、時々ナーノといつて言葉が出てくる。使われている言葉は外国の言葉かと思ったがどうも古語のようだ。ちょうど言葉が途切れた時にバスローは思い切つて声をかけてみた。

「ナーノの死体はどうなつたんでしょうか？」

2人がこちらを振り向いた

「ナーノの何だと？」

「死体を・・・といつても石化していて石像になつていましたか。」

「それはどこで見た。」

「キリークの宮殿内の謁見の間です。天井に横たわっていたなんですがどうやら落下したようです。」

「 そうか。」

それから2人の 他の者を交えず「ザガラとエルが話し合いを始めた。

表情には出さないがエルはバスコーからの情報に喜んだ。

エルはずっとナーノを探していたがようやくその居所が今わかつたのだ。

キリーク宮殿・謁見の間。

爆発の時にユリカ、ゴから解放された無軌道な精霊達の拠り所。ようやく解放されたエルとしてはキリークの宮殿を中心にルーパスを詳しく調べる気にはならず放置していた。

爆発により街が破壊されその後の精霊達の暴走後、エネルギーを使いすぎた精霊は消滅・衰弱した。

そんな精霊達の声がエルまで届くことはなかった。

自分が知らない強力な精霊達がどうやら宮殿にいるらしい。

\*\*\*\*\*

トクツ・・・トクツ・・・トクツ・・・トクツ・・・トクツ・・・

心臓の音が聞こえる。

生きている音だ・・・

トクツ・・・トクツ・・・

さあ・・・逃げなくちゃ・・・

あれ?

目が・・・開かない?

ナーノは床に倒れたまま思考を巡らせた。

ノサツポの地を離れて当てもなくともよい、何度も夢に現れるソフィアの死にざまに飛び起き、結局自分はただの孤児なんだと自棄になりかけた時、無性にソフィアの痕跡を見たくなった。

アルシュ王国のエズバルン卿に手紙を出し国王にお伺いを立ててもらつたが王宮深くに立てられたソフィア専用の館に一平民を入れさせもらえる訳がない。

そこでキリークの宮殿の中を見ようと思い立った。

ソフィアが居た痕跡があるかどうかさえ考えず藁にもすがる思いで首都ルーパスまできたのだ。

そして最初に訪れたのが謁見の間。

ところが入つて玉座に近づいた途端、突然床が波立つた。逃げようとしたが鉄と銀の扉は開かず、地から足を離さなくてはと玉座に上りかけたところ下からの疾風で天井に叩きつけられ……

今、床にうつぶせで倒れている。

部屋いっぱいに満ちていた精靈の気配がいつさい消えてしまつている。

身体が重いのは何メートルもある天井から落ちてきたせいだろうか？ しかしどこにも痛さはない・・・腕や足はもちろん瞼さえ動かす事が出来ないだけだ。

これじゃ床に縫い付けられた標本じゃないか！

いくら頑張つても身じろぎひとつ出来ないナーノはやけになりふてくされた。

床にうつぶせ状態のナーノは自分の身体が石化している事に気が付かない。

そして自分のうなじに小さな電極が付けられ規則正しいパルスを発

している事を。

その材料は王座に残されたゴミゴエルの一部。

今までばらばらにうごめいていた宮殿内の大精靈達が今や一つとなり、ナーノを自分達の王に・・・精靈王にすべくその体に干渉していた。

火が石を溶かし金属を含ませ水と風が温度と圧力を整えその合金は

ナーノの体に入り込みそこに電流が流れ行く・・・

「正確に！確実に！時間通りに！」

ユリカゴのどこかで聞いていた人間の言葉が何故か彼らをせき立てていた。

## 第一十一章

宮殿で大精靈に囚われたナーノの話を聞き、精靈王エルは再度首都ルーパスへ行くことに決めた。

呪われしあのヴァーウェンめが我力を利用して建てたあの城へ！

バスローはエルに策があるのかと尋ねたが、何も答えない。精靈の信条“為るがままで在れ”では絶対に負けると何度も言ったがどう受け止められたかさえその表情からは解らなかつた。バスロー自身の記憶を総動員して聖骸靈録を始め今まで読んだ書物に、今回のような大精靈と戦うなどという例があつたか考えたが、残念ながら記憶に無かつた。

では

精靈王が負けたという話は？

その記録は残されている。

やはり人が作った妖都ベルーシアン。そのベルーシアンの守り主ゲロードンという人造怪物に負けて、頭は空へ腕は雲へ銅は木へ足は山へと四散した。

その日の夜から星の位置も日の出の時間もがらりと変わり、全世界的に異常気象が起きたという。それらしい大異変の痕跡が2億年前の地層から出ていて、大量の生物絶滅が確認されている。

負けというより相打ちだ。

もちろん聖骸靈録研究者はしくれでもあるので当事者のエルにその時のことを見たが「知る必要はない。」と、取り付く島もない。だが、精靈王がいなくなれば天変地異どころではすまなさそうだ。非常に困る。

正直、俺が生きてるうちにそれはそれを田にしたくはないなあ・・・と、  
バスコーは溜息をついた。

\*\*\*\*\*

エルはバスコーと共に山を降りてきた。

肉体があるとはいえエルの身軽さは尋常ではなく、何も言われないまま手を取られ崖から眼下の山道に飛び降りた時は「無理十心中」の4文字がバスコーの頭の中を駆け抜けた。

地面に激突する前にエルが軽く・・・こぼれ落ちそうな花びらに手をかざすような手つきで受け止めてくれたが、腰を抜かしたバスコーはしばらく動けなかつた。

そんな調子で渓谷から里までほぼ一直線で・・・2日かかる山道をたつた20時間で降りてきた。エルだけなら半日で来たかもしれない。

ゴザガラ関係のおかげで山登りは自信があつたバスコーもさすがに目が回り、里についてハリーに電話を入れベンチに座つたとたんに疲れで立てなくなつた。

「こうした方が楽だろう。」

エルが席を譲つてくれて横たわるようにながした。とてもありがたいがその心遣いはどこで身につけたんだろ？

よく考えれば年齢は13歳くらいじゃないか？

下から見上げる精靈王はどう見ても青年。富殿の天井に居たナーノは少年だった。

こんなに年の差があつたのだろうか？肉体の成長速度が違うのか？

「貴方は疲れないのですか？」

「この身体は人として常に健康体に保たれるらしい。」

「無意識に？」

「ええ。」

「つらやましい・・・」

「そうかな？なかなか難しいぞ。」

「そうですか？」

「この肉体から解放されるべく考えうる事をやつてみたが、結局無駄に終わった・・・」

「え？肉体から解放されるとは・・・？」

「ああ、少しでも早くこの肉体から出ねばならないんだがなかなかうまく行かない。滝つぼの中で一日水づけでいたこともあった。アリア山の火口に落ち全身焼いてもみた。人に頼んで首を落としてももらつた。しかし、滅と生が同時に起つるだけ・・・わずかに老化したのみでこの肉体はなかなか朽ちぬ。」

「・・・」

「なんだ？なんだこいつは？俺が手を引かれていた相手は不死身でしかも自殺願望者か？身体を愛しむ事の無い奴だったのか。そりや崖から落ちるし水に沈むのにも躊躇しないはずだ。

よく生きてたなあおいら・・・と、ますますぐつたりしたバスコーにエルの顔が近づく。

「なんでしょうか？」

「おまえはコザガラに気に入られている。」

「えつそなんですか？」嬉しいことを言つてくれるじゃないか！

いい奴じやないか。

顔は気に食わないけど。

「ゆっくり休め。我はこことのものと話をしてくれる。」

エルが額をなでるとバスコーは深い眠りに落ちていった。

\*\*\*\*\*

バスコーは人の話し声で目がさめた。

もう使われなくなつたバス停のベンチは、屋根があるという事で休み処になつてゐる。

縦に長いバスコーを邪魔そうにしている女の子3人分の声が非常にかしましい。

「私はそこに立つていただけなのよ？」

「うん！わかつてつからその先言つて…」

「じらさないで早く！」

「んじやつ、その人がね三叉路のところから山の道に入つてつたのよ。」

「うん」

「そしたら山がいきなりどかーんつて！」

「…」聞いていたバスコーがびっくりした。あいつの話に違ひない。

「あ、それでか～！」

「なんであそこに貴族様がいるかと思つたけど。」

「温泉が出た時に偶然通りがかつたみたい。す～いびっくりして動かなかつたもん」

『それびっくりしてませんつて』

「人が集まつてくる前にどこかに行つちやつた。」

「すごい美形だつたんでしょう…」

「どこかの王子みたいだつたつて聞いた。」

『いの国です』

「！」

「！」

「！」

？？？

静かだ・・・何故？

ひんやりとした指が額に触れ、全てを悟つてバスコーは目を開け起き上がつた。

噂の王子様がいた。

「ハリーが来たんですね？」

無言でうなづくエル。

バスコーは急いで立ち上がり急ぎ足で歩き出したが、ふとエルを見ると女子学生の固まりを見つめて立っていた。もちろん女子学生もエルを熱く見つめている。まずい！

「さあ。見世物じゃないんだから行くぞ！」

どちらへというともなしに怒鳴ると、エルの手を取り強引にその場から離れた。

すると1分も歩かないうちにハリーの車が近づいてくるのが見えた。

\*\*\*\*\*

「バスコー！」

車を傍らに止めると転げ出るようにバスコーが降りてきた。

半分安堵し半分激怒の真つ赤な顔でバスコーの元に突進してきたかと思うとおもむろに左手を取つた。

「おまえ！ これどうしたんだ！？ 大怪我しやがつて！ あれ？ えつ？ これってまさか精霊にやられたのか！？」と質したが、バスコーが

## 答える前に

「痛そうだが大丈夫か?いや、そうでもないか。ここから先は感覚無しか?」と、コンコンと軽く大理石を叩く。

「俺もいろいろ見たけどこんなすげーの初めて

「ん？」

思考が一区切り付いたようでもうやくバスニーの顔を見るハリー。

۱۱۷

「義手要る？要るよな  
入れてくる！」

いいかげん隣に立ってる奴に気づけよーと心の中で毒づきHULを示す。

ハリーは、ああ、と今気が付いたような表情でエルに一礼した。  
「はじめまして。『ミコエル製作所のハリー・クロノティと申します。すいませんが、取り込んでおりますので後ほど改めてご挨拶させていただきます。」

流れるよ、うにそれだけ言つとぐるりとき、びすを返した。

ハリ!! 工川様たそ!!

「え？」

・・・きびすを返したその姿勢でふたたび180度反転したハリー。

「顔見りやわかるだろ。」

「お母様のソフィア様に似て、一〇〇しゃる。

111

エルの無言が痛い・・・バスコーは場の空気を変えるように大きめな声で目的を伝える。

「キリークの宮殿に行く予定だ。詳しくは車内で話す。」

「……そういう事なら、こちらも宮殿がらみで教えたいニュースがある。とにかく我家に行こう。」

3人は車に乗り込んだ。

ハリーは運転しながらバスコーが宮殿で精霊達に襲われた状況やそこにナーノが居たことを知つた。

おぞましい話だ。ハリーの中ではナーノの身体はすでに砕け散り石の残骸になつていた。

また、精霊王エルの目下の問題：その身体からの解放についても聞かされたが、件の自殺まがいの肉体解脱法を聞かされると、車をいつたん停止させ、

「その身体はあなたが両親からいただいたかけがえのないものですよ！それを・・・。無茶苦茶しやがるのはやめて下さい！自分の身体を粗末に扱うなんてとんでもない。ソフィア様が草葉の陰で泣いていますよ。」と、懇々とエルに諭した。効果の程はわからないが、エルはじつと聞いている。

ここはルーパス中心部から60kmほど離れた位置にある農耕地帯。幹線道路から脇道にそてて程なくレンガ造りの瀟洒な家が見えてきた。

車はその駐車場へと吸い込まれていく。バスコーも一度だけ来た事があるが物置小屋としか使つていないハリーの別荘である。

中に入ると意外にきれいに片付いていた。

家にあふれていたゴザガラの資料を大学に寄付したせいだろうか。大学は爆発と共に建物が崩れ、3年経つた今も資料はがれきの中だつた。

「適当に座つてくれ。」

客間は大きくはないが品の良さがそこそこに伺える。座るとすぐに一枚のFAX用紙を手渡された。

地元有志による新聞の記事と政府の広報が印刷されている。

宮殿の電力が回復したと、宮殿は相変わらず人が入れない状態なので近づかないことの警告と、それに絡んだ10件あまりの変死事件・・・

「2日前に来たFAXだ。最近夜になると煌々と電気が点くそうだ。

・・昔のままに。どう? オカルトチックだろ?」

「・・・いるな。」

「精霊のいたずらか?」

「う・・・む。いたずらにしては仰々しい。意思を感じるね。」

「人を驚かそうとして?」

「そんな可愛らしい妖精みたいなものならいいんだけど。」

バスコーが左腕で丸テーブルの端をコツンと軽く叩いた。

「うつ・・・だな。」

好戦的で嗜虐的。そんな性格の大精霊達が宮殿の中で活動を始めたのだ。

部屋の向こうから蒸気の音がピーと聞えた。

やかんが沸いた音にハリーが急いで出て行つた。

「エル様?」

ずっと静かにしていたエルに目をやると、どうも顔色が悪い。

「車酔いですか? 窓を開けましょうか?」

いいながら窓を開けると風がさつと入ってきた。

それは部屋の中を軽くそよいで、エルの髪をふわりふわりと撫で上げながら精霊王にまとわりついている。

精霊か・・・もうこの程度じゃ驚かん。

エルが手を上げその風にキスをすると風は一瞬乱れた後収まった。

バスコーは何か見てはいけないものを見てしまったようないたためなさを感じ、まだ来ない扉の向こうのハリーに顔を向けた。

「これが今のところ宮殿関係でそろえられる資料です。工場に寄つていただければ最新情報を漁る事が出来ると思いますけどね。」

卓上にはまず宮殿内部の見取り図が置かれた。

ヴァレリオ王結婚の際、マスクミがすっぱ抜いた宮殿内部の見取り図なので精靈王を奉る大聖堂がやたら詳しく紹介されている。素晴らしいことにその見取り図は宮殿の1階全ての部屋の位置を正確に描いていた。

使える。

それとは別に藁半紙のよつな粗悪な紙に手書きされた、その地下にある予備電力に関する簡単なレポートが2枚。

図解された炉は2つ。一つは火力であり一つは水風力である。

それがどちらも大容量蓄電池に接続可能な状態で、火、または水の供給源として使用できる他に逐電も可能となつていて。

いずれもユリカゴが在るのが前提のシステムであり、宮殿内の電力・熱・水を10日間程供給出来るだけという代物である。

今はこれらが大精靈の手中にあり、独自に機能出来るよつに改造されたのだろう。

もう一つ。こちらは情報だけだ。

宮殿から程近くにあるいくつかのホテルにぽつぽつと集めれば100人程度の人間が滞在しているという。

それは爆発の直後に人が街を捨て、逃げられなつた者が自家発電機能を持っていたホテルに避難し、そのまま居ついたのかと思われた。いや、当初はそのような人達にまぎれていたが3年経つた今ではつきりと彼らの特徴が浮かび上がつていて。

彼らはエネルギー関連技術者。全てユリカゴに関係していた者達だつた。

\*\*\*\*\*

「我、精靈王よ。おはようござります。」

窓に打たれた板は剥がされ朝の日差しが深く差し込む謁見の間。内装の崩れた壁は元通りに直され、床も塵一つ無くきれいに磨き上げられている。

だが部屋の上座に備え付けられた玉座は以前の惨状のまま大きく崩れています。

そして今、その玉座には足を組み両手を肘掛けに置いた少年とその前にひざまずく老人が一人・・・

少年は老人から挨拶を受けても一言も声を発することもなくただ人形のようすに座っている。

その顔はうりざねの上品な顔立ちだが、服装は妙にけばけばしく、緑と淡いオレンジの上質な毛織によるダブルジャケットに首元から赤レースがのぞいている。

レースで覆われた胸は呼吸をしている様子も無く、肌は血の気が引いたように白く、目は閉じたまま顔の表情も動かない。

しかもその髪は老人のようすに白く、後ろへと流されて背後に落ちる。それが異端の精靈達の王、精靈王ナーノの姿だつた。

彼は生きているのか死んでいるのか・・・

ナーノは玉座と同化してしまつたかのようすに動かなかつた。

方や、ひざまずく老人は白衣を着て弱々しく膝を折り新しい精靈王を崇めるような眼差しで見つめている。

ファーゴ・ナント・ウェルナル。

齢78の高齢ながらこの不自由な宮殿にもぐりこみ早2年目。

その人生をコリカゴにほとんどつき込んできたこの老人は爆発のそ

の1週間後には宮殿地下に入り込みとある仕事に専念していた。そして今、新たな精靈王を頂き、太陽が謁見の間に差込み始める頃になると必ずナーノの元へと朝の挨拶に訪れるのだ。

もちろんメンテナンスも兼ねて。

精靈はそもそも自然の中から湧き出るささやかな靈体でありその力はこの地上の天地自然の枠を超えることはない。

その長たる精靈王の力もまた、結局はこのささやかな靈体に寄るところであり、この星の安寧の為に膨大な数の小エネルギーを駆り集めて莫大なエネルギーと成し異常事態を収束させていた。

人の手に落ちた精靈王はこの非常時の力を常時出すように調整され管理された。

そして人はその膨大にして多彩なエネルギーを人工的な環境下に閉じ込めさらに増大させる事を思い立つ。

その環境とは、星の表面には存在しないマントルの圧熱や宇宙空間の重力そして超低温。

この100年、その間に徐々にテクノロジーは進化しここ近年ではさらにそれが加速され、その特殊環境の中にささやかならざる靈体を生み出し人々の暮らしを向上させた。

そしてキリーケ110年目にしてエル解放。

それともにその特殊環境も消えた。

外部に放り出された荒ぶる異端の精靈はあらゆる所に駆け回った。自らが今までどおり生きていける場所を探して。

そして人間もまた。

地上ではユリカゴの爆発を知った者達 すぐにその現状を把握し、ユリカゴ内に勤務する者の総員死亡とエネルギー炉の喪失および原資である精靈王の遁走を把握した者達 はすぐに行動を起こした。

今まで点検だけされて使われていなかった予備炉に火が灯る。

異端の精霊達はその身を自然界に飛び散らせ天を搔き地を削り海を焦がし消滅していった。

人間達が安全と言える炉を作る為に試運転を繰り返すうちに“それ”が、集まってきた。未だ異常なエネルギーを持つ大精霊の生き残り達が。

エネルギー再創生の準備は着々と進んだ。

ただ、それにはどうしても必要不可欠な装置が欠けていた。

精霊王エル。

この全精霊種を把握し協調させ分断し配合するシステムはどうしても開発できない。

もちろん大精霊のいずれもその役割を担うスキルが無い。

そんな時に代替品を発見した。

ナーノである。

バスコーが拡声器で話しかけ、それに答えた事で研究員に気づかれたのだ。

こうして・・・人と自然の協調により大いなる未来を再構築する足がかり、第一のコリカゴが宮殿の地下で完成した。

\*\*\*\*\*

「どうぞ。お隣のマウランさんからの差し入れです。お食べ下さい。

」

夜まで続いた作戦会議は蓄電池を使いきり灯りが消えたところで一端途切れ、エルがハリーの言いなりに雷電を引いてきそうになり大混乱。近くの草原にでかい雷が落ちて収束した。

結局翌日早朝よりあらためて会議という事になり、只今次の日の朝である。

3人の前にエッグトーストとボイルポテトが乗った皿と淹れ立てのお茶が並ぶ。

「さてと・・・蓄電終了まであと1時間ありますからその間に食事して撤収準備ですね。工場に寄つて完全充電させてもらつてその間にもう一度知り合いに連絡入れます。」

はもう一度知り合は運縁人ねまう」

萬葉集卷之三十九

「そういう奴だつた。俺の話を真剣に聞いててこつちが恥ずかしくなるよ。」

「恥ずかしいならおちやらけなきせいのに。」  
「それは、」

「あー、ハリーからおちやらいけ取つたれ何も残んねーけど」

しばらく黙々と食べる3人・・・いや2人。

卷之三

うなずくエル。

「やはりお口にあわないのでしょうか？」

エルはバスコーの方を向き、

そう一言言つて部屋を出て行つた。

「……………」ビ�いう意味?」

うなずき1人分を2人で分け合いいエルが置いていつたナゾ賭けを頭  
要するに食べないで事が空 2人で分け合はず

の内で考える。

2人にとって目の前の精霊王エルは本意であろうが不本意であろう  
が肉体を持っている以上その為の食事は必要だろうと思う。  
そして彼がキリークの国王の忘れ形見である事も知っている。  
即位こそしていないがキリーク第5代王であり精霊王もある。  
粗相がないように扱っているつもりだが、やはり何か失礼なことを  
したのだろうか？

食事を終えると2人そろってエルを探しに外に出た。

「あそこだ」

1km程先の林が未だに朝もやがかかってたままだ。  
急いでそこに向かえば果たしてエルは霧に濡れたまま木株に座つて  
いた。

「エル様。」

「お風邪をひきますよ。」

2人が声をかけると背を向けたまま

「私は精霊の長だ。」

「判つていますが・・・身体は人間でしょう？」

「だから困るのだ。この身体の方と話すが良い。」

「？」

身体の方と話す？じゆこと？

「エル様？」

語りかけると向こうを向いていた身体がこちらを向いた。

「エルではない。」

金の髪に緑の瞳はエルのままだが、雰囲気がまるで違う。  
言つてみれば迫力が無くなりどこにでもいる普通に顔立ちのいい青  
年だ。

「では何とお呼びしましょうか？」

「・・・アルフィード。」

「わかりました、アルフィード様。私がバスコーでこちらがハリーです。」

「知っている。エルが知っていることをわたしも知ることが出来るから。」

「という事は・・・聖骸靈録とかも知ってるんですか！？ベルーシアンとか判ります？」

「まてまてハリー！今は優先順位の高いほうから質問しよう。」

困り顔のアルフィードと空氣の読めないハリーの間に割って入ったバスコー。

「精靈王の為に。」

「なぜ？」  
「それは・・・私に感覚があり感情があるからだ。」  
何だか哲学くさくなつてきた・・・やばいぞと警戒するハリー。  
「五感と感情に振り回されるのは人の業みたいなもんだし、昔から哲学やら文学の命題みたいなもんですが・・・では、アルフィード様、あなたは精靈王に付き合わされて人が普通に食べている食事を拒否しているんですか？」

「ええ。」「せつかく人の身でこの世にいるのに  
「おい、ちょい待てってば・・・では何を食べているんです？それとも食べる必要は無いのでしょうか？」  
「これです。」

アルフィードは何の躊躇も無く足元の土くれを掘んで口に入れようとした。

「わあああーー！」

思わずハリーがその手をつかんで止めさせたが、よく見ると彼の顔にはすでにうつすらと土がついていた。

手を離せばアルフィードは苦笑いしてその土くれをそのまま足元に落とした。

「川や雨で喉を潤し土や木で腹を満たす。劣情は風が慰め喜怒哀楽はこれが受け止めてくれる。精靈王に殉じるわたしが口に許しているのはここまでです。」

『ーー』

2人の日はアルフィードが取り出したものに釘付けになった。

アルフィードが手にした白い布はあの日のソフィアが着ていた純白のドレスの一部に間違いない。特徴のあるレースが無残に引きちぎられ冬の枯葉のように生地に張り付いている。

アルフィードはすぐにそれを懐に戻し、2人に向かい静かに質す。

「もし、川の水を汚濁と感じ雨風を厭つとしたら・・・わたしが感じじるままにヒルが感じ感情が芽生えたら世の中どうなると思いますか？」

それは・・・まずい。

人の感性では腐毒醜穢と思うものでも自然の中では重要な役割を担つているものである。

「わたしにかまわないで下さい。特に女せ」

アルフィードは突然口をつぐんだ。

特にじよせ？

そのままスッと立ち上ると、静かに土を踏みしめて2人の横をすり抜け山の小道を降りて行つた・・・そこにアルフィードはいなかつた。

山から家に帰つて来たものの毒氣をぬかれたような氣分で2人は車に荷物を載せ出発の準備を終えた。

「お母、どうしよう・・・新鮮な川の水でもさし出しゃいいんだろうか。さすがに水溜りじや不敬だよな?」

「お前の発想にや本当になぐさめられるよ・・・」

ハリーの真剣な顔を見ながら頭を抱えつつ笑うバスコーに軽く蹴りを入れるとハリーはやけくそ氣味に「さあ、乗つてくれ!」と怒鳴つた。

一行は「ミコエル工場へと向かい走りだした。

「」はハリーの別荘から車で30分程走ったところにあるホロットルという首都ルーパスに隣接する地域。

爆発後にこのあたりの住民は全て避難しその後もしばらく帰つくる者はいなかつた。

「束三文で売りに出された街外れの工場をそのままハリーが買い取つた。

「ミュエル工場は遠くからでもすぐに判る大きな自家発電塔を有している。

「あれがこのおもちゃの工場です……一応言つておきますがそれは壊れているわけではありませんから。」

妖精王の膝上には「ミュエルが乗つており、バスコーはエルがコミュールを使って何かしらの会話が成立するものか実験しようとした。しかしいつもはペラペラ語る小石は精靈王の手の平で沈黙し静まり返つてゐる。

「・・・」

氣の毒なので小石をあずかりエルに「何か質問は?」と、訊けば「今はない」という。

では仕舞いましょうとエルの膝から「ミュエルをどけよつとする」としつかり握つて離さない。どうやら氣に入つてくれたようなので、ここは謹んで献上する事にした。

工場に入るとすぐに車はチャージ用ガレージに入れられ、3人は事務所に入つていつた。

「社長、おはようございます。資料と写真はこのうちのファイルにまとめてあります。」

事務所に入ると奥からケイガン嬢が現れファイルを2つハリーに渡

し・・・大きな目を尚大きくして固まっている。

エルを見ている。

エルもケイガン嬢を見つめている・・・  
急にエルがケイガン嬢の身体を抱きよせた。

なんだ！？これがアルフイードが言っていたあれか！？と、思うより早くバスコーは2人を引き剥がしケイガン嬢の腕を掴むと奥の部屋に投げ込みドアを閉めた。

エルはただ立つていてるだけだが、不愉快とばかりに眉間に深いしづが寄つていてる。

「エル様・・・あなたですか？それともアルフイード様ですか？」  
「話す必要はない。」

「アルフイード様と話をさせてください。」

「・・・」

エルは出て行つた。

ハリーはファイルを掴んだまま何も言えずに成り行きを見ていたが、エルが出て行くとすぐに奥の部屋に入つてみた。

ケイガン嬢は頭を抱えて半狂乱になつていた。

\*\*\*\*\*

舌を噛まないようになにタオルを食ませ手足をロープで縛つたあと、ソファーの上に放置して部屋を出る。

「色情魔だな・・・エルは何をやるうとしたんだ？」

「想像ついてんなら訊くなよ・・・とにかくエルを掴まえよう。彼は山の中に置いて我々がナーノを連れて来たほうがいいんじゃないか？都会は彼には刺激が強い。」

「出来ない事を簡単に言つなよ・・・」

2人は話しながら事務所を出て操業中の工場に何とはなしに向かう。  
「オカルト富殿に入り込んでナーノの破片をかき集められるか？」  
ハリーにとつてはナーノは石像の破片でしかない。

「持ち上げるだけでも無理だよなあ・・・」

バスコーも頭の中にあるのはあの石像の子だ。

敷地内の車道上で2人は立ち止まる。

「分かれるか。俺、配達所に行くよ。」

「じゃ、俺は工じょ」

突然耳をつんざく大音響にバスコーの声はかき消された。

「！　！　！」

音はすごいが衝撃は少ない。

見れば発電塔の上半分が吹っ飛んでそこから黒煙がきのこ状に上がつていて。

「エル！　！」

バスコーは走りハリーは呆然と立ち尽くしたまま。

上からバラバラと破片が降つてくる中、バスコーがなりふりかまわず発電塔までたどり着けばはたしてそこにはエルが立っていた。

片手にコミコエルそして炉にシールが張り付き右手に拡声器。

エルは・・・精靈王エルは笑っていた。

バスコーはその笑いに絶対的な壁を感じた。

エル　　精靈王！　　何を笑つてゐる！　！

地をさらう様に強く熱い風が吹きバスコーはよろめき倒れ、エルはその風に乗つて塔を駆け上がつて行く。

そのエルをバスコーは地に腹ばいながら横目で追う事しか出来ない。重い身体、風に打たれれば立つことも危うい。破壊された塔は高熱

をはらんで触れば火傷どころではないだらつ。  
人間はなんて弱いんだ。

エルはそれを越え全て従えて空へと駆けて行く。

俺は・・・何も出来ないのか・・・

地に渦巻いていた風が弱まり、バスコーが空を見上げるとエルの姿はすでになく黒煙が千切れ雲の流れと共に空に長くたなびいていた。

\*\*\*\*\*

風は黒線を拡散させながらキリークの宮殿上空を流れていった。

宮殿の地下には交代勤務で24時間稼動している発電炉があつた。  
それを調整する装置は謁見の間に置かれている。

謁見の間から外を見れば昔はさぞやみごとな庭園だったであろうと思われる木々と枯れ草の葬列に銀もまぶしいコリカゴの残骸が突き刺さっている。

そこに、コツツ・・・コツツ・・・と何かが当たつた。

コツツコツツコツツバラバラバラザザ・・・何かの粒が空から降っている。

だがそれは1分も経たない内に降り終わりあとはまた静かな宮殿に戻つた。

気づいた人間も精霊もそこに弱々しい雷雲のなりそこないを見つけ、降つてきた霰にいぶかしんだ。

やがて、はるか東方で中クラスの発電炉が大爆発を起こしたとの報を受け、その塵が上空に舞いそれがルーパス一帯ににわか雨や雹を降らせたようだと分析された。

\*\*\*\*\*

その後の立ち直りはハリーの方が早かった。

バスコーが地面で腑抜けたようになつてているのを見て、怪我の有無だけ確認するとそのまま背負い建物の中に連れて行き、とつて返して会社の敷地をあちこち駆け回りながら従業員の安否を確認し周辺住人に説明した。

その後大挙してやつてきた保安関係者に適当な理由を繕つて納得させけが人を搬送し・・・あつという間に3日は過ぎた。

爆発した発電塔も手痛い損失だつたがそれ以上に2人を深く悲しませたのは、あの巨大岩 コミュエルを作ろうと思い立つたあの夢を見てくれた巨大岩 が発電塔の中に投げ込まれ粉砕されていた事だった。

これは処刑なのだろう。

自分達がやつっていた事は間違つていたんだろうか・・・?

自然と仲良くななどと思うのは人の慢心なのか?・・・エル! 答えろ

!!

もちろん、彼らは知らない。

永遠に知る事は無い。

精靈王がこの一帯で一番大きいこの自家発電塔で何をしたか。

その日ルーパス一帯に降つた雨や雹の中に、細微な塵と化したあの巨大岩があつたことなど・・・

夜になるととたんに冷える。

「こ」は工場内にある宿舎。

社長はじめ重役は時に泊り込む事があるので専用の部屋を用意している。

ハリーはバスコーの部屋に入り円形ストーブに火の種を追加し敷石の上に置いた。

電灯は節約の為消してあり、部屋を照らすのはその火だけ。火は水素を燃やし青白く灯っている。

それを見つめるバスコーは何やら難しい顔をして思案顔である。だが、実のところ頭の中は何も考えてなどいない。

あの日 エルが発電塔を爆破した日からバスコーはこんな調子だ。

「なーバスコー。この騒動で吹っ飛んじゃつたけどお前の左手の義手作らないといけないな。」

「・・・」

「明日義手屋に連絡して来てもらいつよ。いいだろ?」

「こ」のままでいいよ。」

ため息と一緒に口から漏れた言葉に張りは無い。

「あのさーそんな手じゃ イザつて時に困るだろ?」

「イザなんて時ないし。」

「ケイガン嬢に襲われそうになつた時とか。」

「・・・」

バスコーの脣に馬鹿なことを言つてやがるとでも言つようが苦笑いが浮かんだ。

久々に見たバスコーの表情にハリーは満面の笑みで明るい声を出し

た。

「手を作つてまた山に登る。」

バスローは顔を上げハリーを見た。

その唇はまだ笑みを残してはいたが大きく見開いた目は悲しみを湛え、ただ首を横に振つた。

「じゃ・・・俺はそろそろ寝るよ。火だけ気をつけてくれ。」

ハリーはこの1週間、工場の事故処理に追われ寝られる時に眠り食べられる時に食事をする生活が続いていた。

深夜ではないまともな時間に眠る事が出来るのは事故後初めてになる。

「ああ。おやすみ」

「ああ。」

ハリーはバスローの部屋から静かに自分の部屋へと帰つていった。残された男の目の前では炎がゆらめいて部屋の中を仄暗い藍に染めた。

『まるで海の底だな・・・』

地上の命を産んだという原始の海もこつだつたのだろうか。

水とマグマと雷と・・・原始の海で生まれた命はいつから意識が芽生えたのか。

最初は光を感じるだけの糸のような神経官を持つた動物プランクトン。

いつの間にやらその先端がふくれ脳となり、周りを知り移動するようになり

やがて骨に沿つて髓に節が出来そこが・・・

腕組みしたまま火のゆらめきに気をとられていたバスローははつと気がつき顔を上げるとドアの前に件のケイガン嬢が立っていた。

いつの間に部屋の中に?

出て行けと言おうとしたが、なぜかその気力も出でこない。

・・・それとも青い灯りを受けて佇むケイガン嬢がまるで海の精霊のようすに神秘的だつたからだろうか。

長椅子に横たわるバスコーに氣をかける様子も無く彼女はストーブに近寄り火にあたつた。

彼女の影が壁に大きく影を作る・・・彼女が身動きするたびに影は大きく揺れ変形した。

宇宙の揺らぎだ・・・それとも全てを飲み込むブラックホールか。影を見つめながらだんだん眠気に誘われていたバスコーにケイガン嬢が近づいてきた。

あれからずつと発狂状態の彼女とはまったく別人の女性がそこにいる。

彼の頬に彼女の手が添えられた。

それはストーブの熱を内包し冷たかつた彼の頬に熱をもたらした。思わずその手に右手を添えると、彼女は少し微笑んだ。

そして、自然に・・・まるで春風に吹かれた花びらが静かに地面へと落ちてゆくように彼女の唇が彼の唇にゆっくりと近づいていった。

\*\*\*\*\*

『えーー・・・』

どうなつてゐるのかわからないが、ケイガン嬢の狂氣が収まつたらしい。

久しぶりにゆつくり寝たハリーが身支度整え事務所に出るとすぐ後にケイガン嬢が現れてご迷惑をおかけしましたと謝罪した。よかつた。

1ヶ月休みをあげるから仕事場に来なくていいと言つと、どうか働

かってくれという。

外にも内にも飛び回っているので、事務所内で連絡の受発信をしてもらえると確かに助かるのだが……

「家に帰つて養生したら？」

「えつ」

そもそもケイガン嬢はハリーの知り合いのフェルナー・ケイガンの娘で工場創設の際に大変世話になつた恩人の娘である。事務関係をやつてもらつてはいるがそもそも従業員ではない。強いて言えばオーナーのお嬢様というところか。

工場爆発からすぐにフェルナーがすつ飛んできて娘の状態が尋常ではない事を知り自宅に戻そうとした……が、ここから連れ出す事が出来ず、結局工場内に医者と女中つきで軟禁していたのだ。まともになつたのなら今のうちに実家に帰つてもうつ方が気持ち的には楽である。

「ここに居たらお邪魔ですか？」

「正直、また再発したらちょっと困るかな……」

「気まずい……非常に気まずいが言わない訳にもいくまい。

「……わかりました。帰らせていただきます。」

ケイガン嬢もその方が楽だらう……

ん？

な、何故？

何故そこで泣くんだ？？

あんな発狂した姿を見た野郎共（約2名）の近くに居るより家に帰つてぬくぬく暮らしている方があなたにとつてもいいんじゃないのか？お嬢さん？？

ハリーが複雑な気分でいると、そこにバスコーが入ってきた。

「一」

社長室の机に両手を当てて突つ立つたままケイガン嬢を凝視するハリーとその前で泣くケイガン嬢の光景を呆然と見ている。

背後のバスコーに気付きケイガン嬢は泣き顔のまま一礼してすばやく事務所を出て行つた。

「どうしたんだ？」

「正気に戻つたらしい。実家に帰つてもいいことにした。」

「・・・ここに居てもうつ訳にいかないか？」

「え？ 何故？」

「いろいろ知りたいんだ・・・彼女にはエルが関係しているし。」  
その言葉にさすがのハリーも真顔になつた。

「・・・俺、忙しいからとてもじやないけど今はエルの事なんて考えられない。バスコー。お前もここに、この会社の副社長なんだぞ？」

そう言つてバスコーの右腕を掴まると、もう片方の手でようやく正気に戻つたらしいバスコーの頬をピシピシと叩いた。

「どうやらお前もまともになつたようだから、俺の代行としてキッチリ働いてもらつぜ。覚悟しておけよ！」

\*\*\*\*\*

結局その1ヶ月後、ハリーとバスコーは工場閉鎖を決断し各方面に調整を行つた。

もつこの先コミニュエルが生産される事はないというニュースは瞬く間に世界中に広まり在庫はあつという間に無くなつた。

あとは工場内の部品組み立て分だけ発送して完全撤収という段になつた時に、今度は強盗・・・しかも武装集団が20人程徒党を組んで強襲してきた。

夜襲だつたため人に被害は無かつたが、在庫部品や金型が盗まれラ

インは全て破壊された。

ハイエナか！！

部品だけ作つて組み立てれば出来上がると思つて いる馬鹿共が！！  
罵りの声が朝もやにつけられた工場にこだまする。

機材売却先に事の次第を報告し、スクラップ屋に爆破された鉄の破  
片を二束三文で売り払つとそこには何も無いがらんどうの空き工場  
だけが残つた。

発売から2年にしてコモドールは市場から消えた。

冬が終わり春が来た。

冷たい風が和らぎ日差しに強さを感じて人は季節の変わり日を知る。それは太陽と空と大地が確実に生きていることを確信させ、約束どおりのそしてその普通の季節の移り変わりといつ幸せな回転に誰もが漠然とした希望を見いだしていた。

キリークの宮殿の中もまた変わった。

エル爆発から枯れ果て荒れたままの中庭に今年は緑が芽吹いた。地下の研究者達の中に植物再生研究会というサークルがあるのだが、枯れ木から、大地からその新芽を見つけ『いろいろ試した成果が今年はようやく実った!』と喜びあつていて。

そしてその新緑と同じ色の瞳が2つ。

謁見の間にかつて崩れた石の玉座があつた場所には真新しい白い玉座がすえられていた。ガラスと鉄の合成金属が美しくなめらかに曲線を作り少年の身体を支えている。

以前は開くことは無かつたその瞳は春の日差しに満ちた室内を眺めキラキラと輝いている。

傍らにいる老人が語りかけた。

「ナーノ様。寒くはありませんか?」

「僕は大丈夫。少し温かくしようか?」

「いえ、申し訳ありません、つい・・・私に合わせると皆が暑がりますのでこのままで。」

「うん。今日は天氣がいいな。外はどうだったの?」

「少々風が冷とうございました。」

「そう・・・」

「もう少しお待ちいただければこの窓ぎわまで行けます。夏には中

庭の花も満開になるでしょう。」

ナーノの改造が進み、有線でつないでいたものが今は無線配信によるコードレスに変わっている。ただ謁見の間、しかも玉座より半径3m以内が行動範囲でしかない。

そこから離れると“コリカゴ<sup>2</sup>”のシステムからの相互認識からはずれ精靈達の動きが乱れるのでやはり殆どの時間をナーノは玉座に座つて過ごしていた。

そもそも最初にナーノを玉座に座らせたのが間違いのもとで床に寝せておけばその後の作業は楽だったものの、研究員の一人が冗談で座らせ周りの同僚もその調和の妙に感心し配線などを玉座を中心に敷設したのである。

そして、玉座が変わり行動範囲が広がつてもナーノは玉座に座つている。

その表情はソフィアが居た頃のナーノにほとんど近い。だが実のところ彼の身体は石のままだった。

炭素合成素材という一見人肌かと思わせるなめらかな曲線と柔軟さ。自然と人工の差が縮まる。

その目に映る謁見の間も瞳孔から脳に届いたものなのか、実は地下の装置を経由しているのか・・・ナーノ自身も判らない。知っているのはそれを担当している研究員だけだろう。

成長しない永遠の少年を哀れとも思わぬ老人は今あるテクノロジーの最高峰を彼につき込み続けそれを寵愛し礼賛している。

\*\*\*\*\*

「グツー！」

「！」

月日が流れ芽吹いたのは草木だけではないようで、今じぶしをフル  
フル震わせて仁王立ちなのはフェルナー・ケイガン。

そして床にうずくまつてるのはバスコーである。

その横で恐縮しているのはハリーで、すでに往復ビンタをされて頬  
が腫れている。

「どうしてくれるんだ！おまえらは・・・もつ信用できん！」

フェルナーの後ろにはケイガン嬢が涙目で立っている。

「おとうさ」

「黙つてろ！」

娘が子供を身ごもつた。

本人も知らなかつた。

しかもどうやら父親らしき男も知らなかつたといつ。

そんな馬鹿なことがあるか！

娘がちよつとおかしくなつた時期を考えればこいつらしかいないけだが、自分かもしれないなどとあやふやな答えを聞かされた父親  
は激昂した。

正直に言えば問題が解決するといつのは嘘である。

殴られて意識が飛んだところでバスコーもしまつたと思つた。

ケイガン嬢の妊娠を知つたときに何となく思い当たる夜が頭をよぎり彼女と一緒になる覚悟と自信とを持つてケイガン家に乗り込んだが、つい知らない事を知らないと言つてしまつてこのザマである。覚悟が足りなかつたとしか言いようがない。

その日一日中、ケイガン家から怒鳴り声が途切れることは無かつた。

「ハリーすまない。」

「いいよ。もう・・・驚いたけどね・・・よく10も年下の子を抱いたもんだな。」

「・・・」

「エルが仲介人なの？これつて。」

無言でうなずくバスコー。

「じゃあ、おめでとう！バスコー

全精靈の祝福を受けし婚姻に

幸いあれ！」

「なんちゅう皮肉だ・・・」

げつそり顔のバスコーに満面笑みのハリー。

コミニエルのおかげで成金状態の両人は今はそれぞれ事業を立ち上げ社長となっている。

生活に困らせる事はないだろうとは思うが、バスコーの身分が民人だという事でケイガンが渋い顔をした。

ケイガン家は大貴族に仕える侍従　　身分は民人だが世間的には準貴族だ。

『俺、キリーク王家に知り合いがいたんですけど・・・』

こう正直に言えば問題がもつとこじれるのは間違いない。

もつとも、バスコーの家は初代ヴァーウェン王までさかのぼると立派な貴族でありケイガンが後にその事を知つてから身分差に苦言を呈するような事はなくなつた。

## 第二十八章

春も盛りの花ざかり。

だが、ここに来て天候不順が続いた。

急な大雪が街に降り、突然25度を越える日が続いた。

やはり、まだ天候はおかしいのか・・・

市井の人々はあきらめ顔で日々を送る。

その頃宮殿は慌しい事となっていた。

10日後にアルシュ王国の冷血王フェルーンがやつてくるという。

宮殿内のエネルギー・システム完成の報を受け、まず表立て行動してきたのはアルシュ王国だった。フェルーン王はそもそもソフィアを送り出したあたりからキリーケ攻略を色々と画策していたらしい。

ユリカゴ爆発後その計画も一旦白紙状態になつたが、昨今の宮殿の情報を聞きつけいち早く研究員達に警備の申し出をしたのだった。キリーケは王惨死、継承者なし（公式）で王家は潰え、城を警護していた近衛兵は全員死亡。宮廷内の貴族は各領地に散らばり政治体制は地方貴族の自治運営へと移行していた。

そこにアルシュは用心深く接觸していくつかの地方を懷柔し、それをちらつかせつつ警護を申し出たのだ。

アルシュの使者に研究員は日和つた。

宮殿に明かりが常時灯るようになつて数ヶ月後民間の警備員（実はアルシュ公安局員）がキリーケの宮殿に常駐するよつになつた。そして、キリーケの首都ルーパスが静かにアルシュの手の内に落ちて数ヶ月。

キリーケ攻略のお膳立てが出来たことを確信したフェルーンは宮殿に乗り込むことにした。

\*\*\*\*\*

「ミコエル工場が爆発したあの日に会つはずだつたリック・ニアバーからその情報をもらいハリーは思案した。

くそ真面目なあいつが情報を流してくるといつ事は、よつほど腹に据えかねる何かが起きているに違いない。

情報自体はたつた一行“ 日 冷血宮殿に来る”。

キリークは王家が（公式には）絶えているから何をしに入つてくるかは明白だ。

隣国とのんでも話はエズバルン卿からチヨロツと聞いているが、あの国は軍人がしつかりしているからまだ民は救われる。

こちらの技術者が果たして隣国の軍人並みに愛国心と義憤に満ちているかというと・・・

ハリーはある決意をもつて車にフル充電をした。

「チツ・・・・今回は毒見がいないや。」

川原で名もない雑草といいやに色が鮮やかな魚の煮込みを食べるハリ。

もう夕暮れて今日はここでビパークだ。

正直、コザガラやまして精靈王に会える気はしない。判つてているのだ。自分にはそういうものに会う体質はない。

バスコーがコザガラに気に入られている事も、摩訶不思議な奥さんとの馴れ初めも（最初なのに記憶がスッポリぬけてざまーみろだ！）そして、彼の5代前が実はエル捕縛に関わっている事も知つていて。これはただ確認に行くだけの登山なんだろうな・・・自分にその手の縁がないと証明する為、そして出来るだけの事はしたといつ血口満足の為に・・・

食べ終わり川の水で飯盒をガシガシ乱暴に洗つていて、取つ手が

カコツといづ音と共に外れた。

「！」

小さなパートでも無いと困る！

慌ててハリーが川の中を追いかけて行くが春の川は流れが速く、しばらく追いかけ足もしびれ息も上がりついに歩を止め川の行く先をただみつめていた。

川の両側から木がこずえを伸ばし、夜の暗さがむらにその影を闇と塗り染める。

気がつけば自分の立っている場所もやはり陰の中で川の音だけが激しくバジバシヤと耳につき引き返そうと思い後ろを振り向けばやはり黒い川がこちらに向かい流れてくれるばかりだ。

なんでこんな所に来ているんだ？

再び川下に田をやると・・・

・・・・・向こうから誰かがやつてくる。

鬱蒼とした森の影から人らしきものがこじらひむかってパシャリ・・・パシャリ・・・と川の流れに逆らいやつてくる・・・

「ゴザガラ様・・・・・？」

つぶやけば、反応はない。

なんだらう・・・幽鬼の類じやないだらうか。いや、山の獣かもしねない。

恐怖の方が先に立つ。

隠れなきや・・・・・・・・・・ビヒニ？

どこにも身を隠すといふなんてないよ・・・ハリーはこの状況に不思議と笑ってしまった。

考えてみたら冷血野郎に國を乗つ取られる恐怖からここに来たのだ。  
いつでも希望に引き付けられて進むより、恐怖に背を押されて動いて  
いるんだよなあ・・・俺つて。

ただ何がこちらに来るのか  
それだけを見てみよう  
ここにいれば何かが来る

空にかかる群雲がゆるりと流れ新月の弱い薄光が岐を照らす。  
ハリーはそこに現にはありえぬ人を見た。  
『あ・・・』  
声にならない恐怖の念が足をすくませた。

## 第二十九章（前書き）

かなりえぐい内容です。

正直吐き気がしますがこの後の展開のため投稿しておきます。

・・・つか、この後ずーーーっとエピローグまでこんな感じです。  
と言つてもエピローグは明日投稿の予定です。なるべく早く書きま  
す・・・

空がどこまでも青く澄みわたり雲ひとつ無い晴天の日。

勇壮なる黒い車の列がアルシュからキリークへと向かつ。

高速道路はすでに貴族だけのものとなり平民が使用する」ことは禁じられている。

その高速道を駆け抜けて行くひときわ大きな麗装車には国王フェルーンが乗っている。

これは凱旋の列である。

戦う事無く手に入れた隣国。

かつて繁栄と平和の象徴と言われ高度な科学とテクノロジーに自らが酔いしれていた目障りな国。精靈王エルに対する傲慢の罪により国家を崩壊させた哀れな国。

だが、俺がその国民を救つてやる。

その科学技術の象徴であるヨリカゴを俺が復活させたのだと内外に知らしめてやる。

フェルーンは柔軟な顔に慈悲の笑みを浮かべて高速から時々見える平民達の家をただ眺めていた。

宮殿の中では王を迎える為の準備が完了し、あとは到着を待つばかりであった。

アルシュ王国公安局の先鋭達が、ある者は貴族の礼服に身を包みあらる者は警備兵として剣を腰に差してあちこちで目を光らせる。

謁見の間にはナーノが正装を着せられて玉座の横に立っていた。

もう一度とこの椅子に座ることは許されないと今朝目覚めた時に言われそれからずっと立つたままである。

緑の瞳が謁見の間を見渡す。頭の中でアルシュ王国国王があと何時

間で来るか計算している。あと03時間18分20・55秒・・・  
宮殿の外に目を轉じれば中庭は今が盛りとばかりにスフの花が咲き乱れている。

麗装車が高速を下りて王宮通りを走り抜けてゆく。

その道端には塵一つなく、そして沿道には誰一人として見物人はいない。

交差点に配備された警備員が唯一の人影であり、しんと静まり返った廃墟に黒と白を基調とした壯麗なる車が走り抜ける。

それは奇妙なモノトーンの世界で、警備の為あちこちにかけられた立ち入り禁止の赤いロープだけが色を放っていた。

やがて車は瀟洒な鋼鉄の門を抜けロータリーエントランスへと入つていった。

宮殿の入り口だけは華やかに飾り付けられ、道には絨毯が引かれ、出迎えの貴族達が遠巻きに見守る中、フェルーン王が車から降りると、その後に近衛兵が続いた。

マスコミは、定位置から写真を撮りまくり世界に発信した。

そして、フェルーン王が謁見の間へと入つていく。

フェルーンが事前に聞いていた説明では、その玉座の横に居る少年は実は人間ではなくキリーケの人間工学の粋を集めた機械なのだという。

それは”ユリカゴ2”の制御装置であり、科学者のちょっととした遊び心であると。

フェルーンが謁見の間に入ると、招待された貴族・騎士・技術者が一斉に立ち上がり彼を迎えた。

彼らを両脇に見ながら玉座に近づくと、その後ろに立つてゐる子供の顔がはつきりと見て取れた。

『これは・・・』

フェルーンの柔軟な顔に影が走る。

この顔は見覚えがある・・・

あの男。

我妹と鉱山を手に入れて尚自分を見下していたあの男の眼差し・・・そしてこの縁の目は我妹ソフィアと同じじゃないか！

段取りとしては、科学者の遊び心に付き合つてその子の額にキスをしてやるはずだつたがフェルーンはナーノを無視する事にした。

『切つて捨てないだけありがたく思いました。』

そして、王座の前に立ち一同を眺め、室内の全ての目が自分を注視していることに満足した。

いよいよ、この国がアルシュ国となつた事を高らかに宣言しようと大きく息を吸い込んだ時、横からよほよほの老人が腰を低くしながら出てくるではないか。

誰だこいつは？

老人はフェルーン王の前で膝を折り礼をとると、顔を上げて王に對峙した。

「フェルーン国王にはキリーク王国にござり来賓いただきましてありがとうございます。わたくしは、『コリカゴ』の総合責任者ファーゴ・ナント・ウヘルナルと申します。」

何をいつてているのだ？

キリーク王国などもうこの世にはないのだぞ？

そして、自分がこの宮殿に着いた瞬間からここはアルシュ王国だ。

「その後ろに立つております少年はナーノと申しましてわが国の象徴でござります。どうぞ」挨拶賜りますよう切にお願い申し上げます。」

象徴？

このやけに、ヴァレリオに似ている子がか？そつか・・・そういうつもりか。

フェルーンは表情をこわばらせた。

それは普通に見れば柔らかな微笑みとしか取れない表情だが、見知つている者にとつては冷笑でしかない。

フェルーンは右手を軽く上げ近くに控えていた近衛兵を呼んだ。

「この者を奥に連れて行け。」

「はつ」

その言葉の意味も近衛兵は弁えている。

老人の脇に手を入れて腕を押さえると奥の部屋へと連れて行こうとした。

老人はこのような扱いには慣れていないのだろう、押さえられた腕をほどこうと抵抗した。

とたんに

ドグツ

鈍い音がして老人は身をくの字に折り曲げ前につんのめつた。

が、近衛兵は手際よく口をおさえて一言も漏らさせずその身を片腕でささえて裏廊下へのドアから消えていった。

技術者達はその光景を見てようやく自分達が招きいた男の正体を知つた。

そこには科学や技術への敬意もなければ人に對する温情もない、ただ恐怖のみで統べる冷酷な権力者が微笑みながら立つてゐる。

そして、ナーノは連れて行かれたファーゴの後を追おうとしたが王座から離れることが出来ずについた。

心配げにファーゴと近衛兵が出て行つたドアの方を見るナーノの後姿をフェルーンは眺めていたがることに気がついた。

うなじから背骨に沿つて何かがおかしい。

まるで服の下に何かを仕込んでいるようなふくらみが見える。

「ナーノと申したな。」

突然声をかけられてナーノはフェルーンの方へと向き直つた。

「はい。」

「人か？機械か？」

「人です。」

フェルーンは今度こそ冷たい笑いをその顔に浮かべた。

「近衛兵！この者は背中に何か隠しているようだ。服を脱がせよ。ざわりと技術者達が座る席から非難めいた息が洩れたが、フェルーンが顔を向ければ誰も何も言わずただ無表情のまま事の成り行きを見ている。」

ナーノは抵抗する事も無く綺麗に装われた正装を近衛兵に手際よく脱がされてゆく。

「ほおお・・・

想像を超えたナーノのありさまにさすがのフェルーンも興味津々でその身体を見た。

脱がしてみれば背骨に沿つて禍々しい黒い突起が並び、角度を変えてみると中で小さく光が点滅しているのがわかる。発光の色が違うのは何か意味があるのだろう。

そして、その突起から肌の下を縦横無尽に何かの線が埋め込まれ左右の肩甲骨あたりと胸の上の鎖骨あたりに集中している。これが無線で地下へと繋がっているのだ。

「よくこれほどのものを造つたものだ。これは素晴らしい！」

その言葉をそのままテクノロジーへの礼賛と受け取つた者は顔をほころばせ、それを次に来る暴虐への前振りと捉えたものは顔を引きつらせた。

「これをそのままこの正面に飾りたい。今度来るときにはこの玉座の後ろに備え付けておけ。」

「！」

ナーノは愕然とした。

飾りたい？備え付けるつてどういう事？

僕は・・・僕は人間だ。

身体はこんな事になつてしまつたけど、技術者の人たちだつてファーゴだつて僕に話しかけてくれたじゃないか。

「君は人とテクノロジーと精霊との大事な大事な架け橋なんだ。けれどどんな時も人間であることを忘れないで。君はこの世で只一つの存在だ。」と・・・！

ナーノが技術者達に顔を向ければそこには怒りの、困惑の、諦めの、さまざまな表情が並ぶ・・・だが誰も何も言わずにナーノを見つめるばかり。

誰も僕を守る人はいないという事？  
僕は飾り物じゃない・・・！

「いやです・・・」

「なに？」

「いやです！－あなたの言う事など聞きません！」

「このつ」

フェルーンはこぶしを振り上げようとしたが、一人の白衣の男が玉座の前に飛び出ってきた。

「王！その者は精霊の制御システムです！乱暴に扱つてはなりません！」

「・・・・・・・・・この者は人か？機械か？」

「機械です。」

「そうか・・・・・・・・・どうもおしゃべり機能は不要だと思われるが、どうだ？」

「そのようだ『ゾゼ』します。」

「そうか。」

王は上機嫌になつて玉座に座ると、男の名を聞いた。

リック・ニアバーと名乗つたその男に即刻ナーノの“おしゃべり機能”を停止するよう命令した。

リックは人体工学は専門外なので同僚のバルカを呼び音声機能の停止を頼んだ　　後ですぐに元に戻せるように。

「いや・・・お願い・・・」

ナーノは後ずさる。

「ナーノ、3m以上玉座から離れるな！」 リックはナーノの腕を掴んで玉座の近くに戻した。

悪いようにはしないから・・・だから抵抗しないでくれ！

「ふーん。機械でも涙を流すとはよくよく素晴らしい無駄機能を搭載している。」

フェルーンはその身内同士の裏切りを楽しんでいるようひどく上機嫌の声をだした。

## 第三十章（前書き）

流血 + グロ表現続きます。

室内の目が一斉に正面の3人に注がれている時、まったく逆の方向で何かが動いた。

パタン

その小さな音に気がついた者はいない。

だが次の瞬間全ての者がいっせいに入り口の扉に顔を向けた。

「おまちなさい！」

凛とした声にフェリス王をはじめ全ての者が呆然としてその女性を見つめた。

王妃ソフィア！

ユリカゴ爆発の原因、精霊王喪失の元凶、アルシュからの雌狐・・・

純白のドレスに白縄のショールで全身を包んだソフィアが、スツ・・・スツ・・・と玉座に向かい歩いて行く。

だが誰も手出しあしない。

近衛兵も警備兵も動けずただ王を見た。予想を超えた存在の出現に命令がない限り動けない。

それを知つてか知らずか、ソフィアはフェルーン王の前に立ち淑女の礼で軽く膝を折り居住まいを正すと真正面からフェルーンを見据えた。

「アルシュ国王陛下。お久しううござります。よくキリーク王国にお越しいただきました。キリーク王妃として歓迎いたします。」

「・・・」

フェルーンは微笑んだままソフィアを凝視した。

ソフィアではない。あれはユリカゴ爆発と共にこの世から消えた。

だが。

顔も声も姿も所作も全てがソフィアだ。以前もこいつやつて唐突に俺の田の前に現れたな。

ソフィアは・・・こいつは不死身なのか？

「死んだと報告を受けた・・・」

「ご覧のとおり生きております。」

フェルーンは玉座から降りてソフィアを間近で見る。本物だ。間違ひ無い・・・このどうしようもなく使えない妹・・・何故今ここにいる！

「近衛兵！こいつは偽者だ！ひつ捕らえろ！－」

待機していた近衛兵はすぐに行動を起こした。

同時に警備に入り込んでいた公安も客席に居る貴族達が反抗しないよう立ち位置を変え剣を手にした。

そんな周りなど氣にする様子も無くソフィアは手を広げた。

「ナーノ！おいでなさい・・・」

ナーノはあれほど追い求めた母の出現に全てを忘れ駆け出した。

「かあさん！」

母と子が抱き合おうとしたとき近衛兵の一人が2人の間に入りソフィアを掴まえようとした。

ザザザザアアツ・・・

雨が石畳を打つようなそんな音がした。

2人の間にはもう誰も立つてはいない。ただ肉と血と近衛兵の制服が床に長く擂りこまれている。

ナーノはそれをやすやすと踏み越え母の胸元に飛び込んだ。

「かあさん！かあさん・・・！」

「ナーノ。会いたかつたわ・・・」

ナーノの背中の発光が全て赤になりアラートが鳴る。だが、そんな事はもうどうでもいい。会えた。生きてた！あのユリカゴで見た残

酷な光景は幻・・・悪い夢だつたんだ・・・ああ・・・あたたかい身体！生きていたんだ・・・かあさん！

間近に居た王はもちろん、近衛兵達もこの瞬時の惨殺を見てひるんだ。

精霊の仕業。

それ以外になにがある？

それ以上にひるんだのは実は公安局から来た警備兵である。彼らは14年前のキリーク宮殿攻略の内情を知つており、精霊がどのように動きその攻略方法が無い事も知つている。

静かにさりげなく彼らは謁見の間から出て行こうとした・・・が、すでに遅い。

床がゆらゆらと波を打つた。

すでにドア近くにいた公安の一人はいきなり上へと突き上げられた。床から勢いよく突き出た水晶が彼の身体を貫いて声を立てる間もなく瞬殺した。

それにひるんだ同僚も驚いた表情のままその場で串刺しにされた。

次々と突き出る水晶の針・・・

裏出口のまわりはすぐに水晶に閉ざされ、その上からは絶える事無く赤い零が滴つている。

後ろの扉に向かつた者はもつと悲惨で扉にたどり着く前に圧力でその場に潰され何人分なのかわからない血溜りのカーペットになつていた。

ソフィアは自分がかけていた白縄のショールをナーノの身体に巻いてあげた。

ちょうど目線が同じになる。

「ナーノ。わたくしの「いつ事をよく聞いてね？」

「かあさん。」

「母はこれから遠いところに行きます。もう会えないわ。」

「かあさん！」

ナーノはソフィアの首にしがみついた。

嫌だ！ またこうして会えたのに……どこにも行かせない。どこにも

！！

「行かないで……！」

「あなたはわたくしとヴァーレリオとヒルの子……強くおなじなさい。こんな事にならないように。」

ソフィアはナーノの身体をさすってあげた。

ナーノは感情が高ぶりすぎてそれに答える事も出来ない。

「さあ……全部取りましちゃうね。」

ソフィアは、ナーノに抱きつかれたままその白い手を静かにナーノの後ろの機械に添えると力いっぱい引き抜いた。

ナーノの背の皮がそれに引きずられ、ちぎれて血が噴出す。いや、それさえも人工のものだった。骨も血も筋肉も肌も脳さえも全て人の手が入っている……それが今のナーノだ。

激しい痛みがナーノを襲う。人工神経がひりつく。痛みに震え強く抱きついてくるわが子の悲鳴を聞きながらソフィアはナーノの身体から次々と機械部品を引きずり出した。ソフィアもまた泣いている。

運命に翻弄され続けた母と子はお互いの涙に濡れながら、機械と配線の束縛を解いていった。

ナーノの身体から部品が取り除かれるたびにそのアラートは消えていった。

技術者達はそれが何を意味するか判っている。

多分、地下で勤務している同僚達は炉の暴走を止めようとあらゆる手段を講じているに違いない。何とか止めなければいけない。だが、目の前の近衛兵の死に様がどうしても視界に入つて踏み出せない。

そこに場違いにも王女に近づいて臣下の礼をした男がいた。

「ソフィア様、始めてお目にかかります。リック・ニイバーと申します。忠心から一言申し上げたいのですが・・・」

「何でしょう?」

「それを外しますと地下の炉が爆発するかと思われますが・・・」

ソフィアはニツコリと笑った。

「ありがとう。その他には?」

「炉の中に居るエネルギー体は外に出れば暴れるだけですが中にいれば我々の良きパートナーです。あの精霊達をどうかあの場所から追い出さないで下さい。」

「それは承知できかねますわ。」

ソフィアはリックの目の前で最後に残ったうなじの突起を引き抜いた。

ナーノの身体が痙攣する。

リックは次に起こる衝撃に身を構えた。

ソフィアはナーノを強く抱きしめそれでも容赦なくずるずると線を引き出す。

爆発は起きなかつた。

炉をどつしりと支えていた床がぐらりと傾き炉がわずかに・・・本当にわずかにその巨大な鋼が捻じれ、圧力の均衡が崩れた。

そして炉の外側から電撃と風圧がその不均衡を突き一体鋼板の炉を2つに割つた。

だが何も起きない。

中から外を見上げる異端の精霊達と外から覗きこむ精霊達。力は拮抗し炉の割れ目を境にお互いが睨みあつてゐる。

ナーノは気が遠くなりながらも母を呼んだ。

「か・あ・・さん・・・」

「ナーノ。全精靈と共にお前を見守つてこますよ。こつでもお前のそばにいますからね。」

ソフィアはややしくナーノの髪をなでてその脣に口付けをした。ナーノは急に田の前が暗くなり何かが自分から消えてゆくのを感じた。

身体がひどく・・・重い・・・。

ナーノは気絶するように跳りに落ちた。

とてもグロいです。

「死ね——！」

ソフィアがナーノを床に横たわらせその身を起こした瞬間、斜め後ろから剣が振り下ろされた。

それは的確にソフィアの首を捉え一瞬にして首と胴を切断した。剣を振り下ろしたフェルーンは得意満面、この不埒者に轍を下した我腕前を褒め称えた。

だが。

ソフィアの上半身がゆっくりと起き上がった。

落ちたはずの首がついている。床には血が飛び散っているというのに・・・

フェルーンの顔は・・・常に顔に張り付いている柔軟な微笑みは、その時ははじめて恐怖に歪んだ。

「うああああああ化け物！」

持っていた剣をソフィアの心臓めがけ突き刺した。

カツーーーーン

甲高い金属音があたりに響きフェルーンの手から剣が飛んだ。床をすべり玉座の前の段に当たるとそれはくるりと方向を変えまたフェルーンの足元にころがり・・・彼の足元にあつたソフィアの手に吸い込まれるように収まった。ソフィアがくくく・・・と笑う。

何故死ない？！」「いつは精霊？いやこんな事はありえない！」「ソフィアなのに・・・」「いつはソフィアなのに・・・！」

得物を持たぬフェルーンが「近衛兵！」と言い放ちながらあたりを見回し、ようやくそこに誰も居ないことに気がついた。

そう。そこに人は居なかつた。

ソフィアとナーノとフェルーン以外は石像となり果てて空ろな表情で立つていた。

謁見の間は不気味な静寂が支配し、フェルーンの荒い息だけがやけに耳障りに響く。

フェルーンはいくつか石像を倒しながら窓際に逃げた。こうなれば窓を蹴破つてやる！

ソフィアはフェルーンの怯える様を凝視しながらゆっくじと追いつめて行く。

陽の光がその顔にあたり、フェルーンはそれがソフィアであつてソフィアではない事に気がついた。

「おまえ・・・誰だ？」

「アルフィード。」

「だ・・・だれなんだ？」

「我弟をよくも弄つてくれたな。」

「え？ おどつと？ なにを」

アルフィードは剣を頭上に掲げフェルーンに向かい一気に下へと切り抜いた。

華麗に金糸と銀糸で飾られた礼装の前がバッククリと割れ、胸に赤い線が走り腰のバンドがすぱりと切れてだらしなく下腹がさらけだされた。

フェルーンは思わず顔を押さえた。その両手の指から血があふれて落ち、そのまま後ろに後ずさり窓に当たつた。

すると窓は簡単に割れてフェルーンは数段下の中庭への道に転げ落ちた。

アルフィードが窓枠にもたれてその行方を見てみれば、フェルーンは道なりに入り口の方へと走つて行く。

と、突然雷にでも撃たれたかのように身を縮め、今度は宮殿の奥へと走り出した。しかし途中でまた踊るように飛び上ると転げるよ

うにアルフィードが立つ窓の下に来て何かわめいた。

剣で切られた傷の痛みだけではない。

そこから全身を猛烈な痛みが苛む。

助けを請う田をしながらアルフィードを見つめるがすでに鉄槌は下された。

フェルーンは罪を全身に纏いながらその場につづくまり、いつ果てるともない罰に身を震わせている。

アルフィードが静かに目を伏せ窓際から離れると、中庭の木がさわさわと音をたて始めいきなりズドンという大音響と共に銀色の巨大な斧がフェルーンの身体の上に振り落とされた。

庭に突き刺さつたままの巨大なコリカゴの破片がついに倒れたのだ。

投稿しようとした文があまりにも陰惨な内容でしたので修正してみました。

アルフィードは床に横たわるナーノを抱え上げると、謁見の間から抜け長い廊下を渡り外に出た。

そこには一台の車が止まっている。

アルフィードが現れるとすぐにドアが開き

「ソフィア様！」とハリーが出てきた。

が、すぐにその笑顔がくずれ不思議なものを見るよつた顔になる。

「あれ？ アルフィード様？」

「ハリー。」

「は、はいっ？！」

「弟を頼む。」

「はい！」

アルフィードはハリーにナーノを渡すと再び宮殿に向かった。

あわててハリーがアルフィードの袖口を掴む。

「どこに行かれるんですか！ 全部終わつたんでしょう？ 帰りますよ

！！」

アルフィードはニッコリ笑うと軽く顔を横に振り

「止めてはいけない」と言つた。

それでも尚きつく掴んではなさないハリーに

「放してくれ。」と言えば風が一陣通り抜けてゆく。

精霊の前触れか。

「ダメです・・・頼む・・・エル！ お願ひです！！」

突然、強い突風が2人を叩いた。

思わず目をつぶりナーノを守るようにしたやがんだハリーがようやく目を開けられるようになった時にはすでにアルフィードはいなかつた。

\*\*\*\*\*

むかしむかし

まだ意識というものがあるかないかの頃から  
同じ声を聞いていた。

「アルフィード・・・必ず出してあげるから」  
くぐもつた声

その人は頭の上に居て顔を見ることはなかつたけれど  
「アルフィード。必ず・・・必ずエルを追い出して助けてあげるか  
らね。」

あれは多分・・・父さまの声。

「アル・・・フィード」

息絶えだえな声

僕に始めて触れた人

僕の手を握り締めた母さま。

僕の祖先、ヴァーウェンが精霊王を捕まえて、その罪はついに我が身  
に至りました。

今から僕はこの身を差し出そうとしている。

母さまが僕を助ける為、死ぬと判つていながらシールドに向かつた  
よつこ。

僕もまた精霊王に殉じます。

何も思い残す事はない。

ナーノが生きている。

奇跡の子が。

もう少し・・・せめてもう少し

車がルーパスを抜けるまでこうして空を見ていてもいいですか？工  
ル様・・・

昼下がりのモノトーンな都。

その中心にある宮殿のエントランスルームから謁見の間に続く長い廊下は左右の窓から陽光が差込み光に満ちていた。

アルフィードはその廊下を颯爽と歩いて謁見の間の扉を開く。直線に曲線を組みこんだ幾何学的造形美の結晶と言われた謁見の間は今や床が抜け落ち地下深く瓦礫が散らばっている。

その奥に鋼の光沢も美しい球体の発電炉がざくりと割れてころがっていた。

その裂け目から異様な圧力を感じアルフィードは恐怖した。

彼らこそが、我が身を死に処す執行者。

精靈王をこの身から解放するもの。

エルは・・・もうあのユリカゴ爆発の時のように我が身を守つてくれない。

ただ深遠より傍観するのみ。

アルフィードは自分の身体を抱きしめた。

結局誰にも抱きしめられる事のなかつた我が身体・・・せめて自分だけでも抱きしめてあげたかったのだ。

そして、床の割れ目から身を投じた。

\*\*\*\*\*

「！」

何か衝撃を感じ、何事かとバックミラーを見ると宮殿の方向に大きく煙が上がりその周りに爆風が渦巻いているのが見てとれた。

「・・・くそうつ！－！」

何も出来なかつた・・・。

あんなに近くにいたのに。

ソフィア様

アルフィード様

何だ？この空しさは？？何故わかつちまうんだ？？？  
……こうなりやナーノだけは何としても！

ハリーはルーパスを抜け出たところで尚加速し一路北へと向かった。

エル解脱。

地下の球体の内と外のせめぎ合には、外の精靈達が潮が引くかのごとく消えた事で均衡が崩れた。その瞬間、内に潜んだ者達は歓喜の声をもつて飛び出し、アルフィードを捉えエルを束縛したその肉体を引き裂き焼きつくし粉々に碎いた。

球体が割れてなお自分達を抑えたエルの力の復活に、異端なる精靈達は自らの平靜なる場所への約束を確信した。果たして精靈王は解脱と共にその場に立つた。

全精靈を結集させ、地上に拡散していた異端なる者達の残滓を召集する。

そのエネルギーの集中に宮殿は跡形も無く飛び散り黒煙が天に舞い上がつた。

上昇する黒煙の先に立ち精靈王は中天に上つた。  
全ては精靈王の元にひれ伏しその裁断を待つ。

そして。

エルは天を差し空を制した。

どこまでも澄んだ青い空に快哉の音が響き渡る。

雲ひとつ無い青一色に白がぼつり。

それがやがて大きくなり、黒い点と見えた一瞬後には巨大な岩の塊が目の前に迫つた。

宮殿があつた場所 かつて人が集いエルから搾取した巨大なエネルギーで脅威の繁栄を謳歌したキリーグの首都ルーパスは隕石の落下により跡形も無く吹き飛んだ。

隕石が落下する直前に地の精靈は大地を割り隕石はその力の全てを地下奥深くへと注ぎ突き進んだ。

その後に続くのは異端の精靈達。地中へ穿たれた穴の尚奥へとそれが入り込みマグマへと圧を加えた。そこには狂乱はなく肅々と確実にかつ迅速にすべてが反応し連鎖した。

エルは碎けた空を触り均しながら一帯の空氣を薄めると、地の底の灼熱の中心を打ち上げた。

この世に寄る辺の無い精靈達、異端にして異常な力、不覚にも人に囚われし我罪の末に生まれし我子達よ！根源なる宇宙にて生きよ！

すでに熱く滾つた地の奥から空に向かつてマグマが吹きだし、それは大気を突き抜け宇宙の向こうをを目指した。

こうして異端の精靈達は自分の居る場所をみつけていった。

地上に穿たれた隕石跡は中央に火山を持ちそれは25年間静まる」とは無かつた。

「俺ら解体業者みたい。」

砂に近い瓦礫を掘り起こしていた手を休めてハリーは天を仰いだ。

「はい。どうぞ。」

少年がコップを差し出す。

「おつどうも。」

ここは火口から約60km離れた元農耕地帯。あたりは瓦礫と火山灰が降り積もりゆるやかな勾配のある廃墟跡となっている。

そのなかで1軒、ハリーの別荘の屋根が砂から顔を出している。コミニュエル工場閉鎖後に暇になつたので、大学から資料を掘り返して別荘に出来る限り持ち帰つていたのだが、35年前の隕石落下+火山爆発で再び埋もれてしまつた。

大学は隕石に吹き飛んだわけだから不幸中の幸いと言つべきなのだろうが・・・

「解体業者というか盗人というか・・・あやしいおっさんだな。」

「疲れた・・・もういいだろ?」

瓦礫の上で伸びをすれば青い空に白い雲が浮かびゆつくりと流れて行く。

それは初夏の青だ。きりりと若い青の空に白い雲が映える。

ハリーもバスローも順調に歳をとり今は聖骸靈録研究会の名誉会長となつて、聖骸靈録の追記を任せられている。

ある意味当事者なのでそれ自体はやぶさかではないが、まさか伝書の追記を書く事になるとは思わなかつた。

それと共に古来からの資料+ナーーに出会つて以降のコレクションが地面の下に埋もれたままというのも心苦しく感じていた。ゆえに気が向いたときにハリーの別荘の窓を割つてちょっとづつお宝を持ち出している。

ただ、来るたびに家が埋もれ崩れているので最近は屋根に穴を開け出入りしているのだ。

「風が出てきたね。」

ここは夕方になると火口の方角から強風が吹いてくる。まだ時間はあるがこれは撤収の合図だ。

「エルめー！邪魔をしやがつて。」

「あいつにとつちゃあ恥ずかしい過去だからな。」

「しょうがねーなあ」

バスコーは工場爆発の翌年春、すつたもんだの末結婚しその年に子供も生まれた。

生まれた子供は金髪緑眼の女の子。

父母どちらにも似ていのその姿は奥さん始めケイガン家一同を蒼白にさせたがバスコーは喜んでその子をやさしく抱きしめた。アルエリアと名づけられた子は1年と立たずに亞麻色の髪と暗青色の瞳に変わり、その後成人して結婚した。

今、目の前で水を飲んでいるのがその息子である。

その瞳のグリーンを見るにつけ不思議な気分になる。

アルエリアの夫も緑の瞳をしているが、こんな鮮やかな色ではない。

あの日、あの海の底のよつた部屋で2人は口付けをした。ただそれだけだった。

結婚したあとに何度も確認したが、本当にそれだけだったのだ。

キスで子供が出来る？

んな馬鹿なこととても口に出せないので2人の秘密にしておいた。

「おいで」

目の前の孫が空を見上げながら水を飲みきつたところで手を伸ばし

た。

アルフィードが中央塔のコリカゴから自由になつたのはこのくらいの歳だつたのか。

ぎゅつと抱きしめると、とたんに野良猫のよつに怒り出した。

「じつちゃん！暑苦しい！…やめてよー！」

天を仰いでぐははと笑い解放してやる。

ハリーもそんな2人の光景を見てふははと笑う。

ハリーはあの隕石落下の日、爆風に煽られながらなんとかシャール渓谷の入り口までたどり着き意識が戻らないナーノを背負つてシャール渓谷への道を歩いていった。

その道のりで、いろんなけものや鳥が近づいてきては森に帰つて行く。

コザガラの御使いだつたのだろう。

いつも小休止する場所でナーノを下ろそうと思つたら、今まで見たことも無い小道が出来ていた。しかもそこに白鹿が立つて銀の角を軽く振つている。

ナーノを背負つたままその道を進んで行くと・・・池？いや温泉！多分コザガラ様の思し召しに違いないとナーノを抱えて入つてみれば、ナーノの身体から血があふれ出したまち湯が赤く染まつてしまつた。

焦るハリーはすぐに出ようとしたが、その足を誰かが止める。

うわああああ・・・！妖魔！…と叫ぶハリーの前に憮然としたコザガラが現れナーノを奪うように抱き上げるとその身をお湯に浸した。

そしてナーノは今もシャール渓谷の奥にいる。

ゆっくりとゆっくりと身体は人になり歳を取つて今20歳ぐらいの青年になつた。

その姿は、キリーク4代目ヴァレリオ王20歳の頃とそっくりだ・

・本当に彼はヴァレリオとソフィアとそしてエルの子なのだ。

今はアルシュ王国となつた我祖国。

以前のキリーケ王家の事を知つてゐる者は少なくなつた。

ましてや実物のヴァーレリオ王とソフィア王妃に会つたことがある者は皆無に等しいだらう。

別に王家を復活したいなどとは思はないが、せめて彼らの話を残しておきたい。

みごと精靈王を生け捕りしヴァーウェン王から4代目、ヴァーレリオ王とその妃ソフィアにいつたい何が起こつたのか。

その王の代に花開いたキリーケ王国の繁栄ぶりを。

科学と技術の高度化がどれほど人を夢見させ、その先鋭化がどれほど人を踊らせたかを。

この先100年も経つたらきっと誰もそんな国があつたなんて信じないだらう。

そして人は同じ轍を踏むに違ひない。

その時まで聖骸靈録研究会が続いてりやいいなあ・・・  
いや、聖骸靈録増補版が残ればそれでいいかな。

人のささやかな思惑など吹き飛ばすかの」とく、今日も今日とて直径30kmに及ぶクレーターとそのまわりに広がる瓦礫と火山灰の砂漠に強風が吹き荒れ砂を巻き上げる。

火山からは今も煙が上がり時々思い出したかのように爆発を起しこしている。

山の緑は濃く空は青い。

海は碧く澄み潮風は遙か彼方まで白波を立たせ雲を湧かせている。

全精靈達に祝福あれ。

(完)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4682x/>

---

精霊王転変

2011年11月5日21時22分発行